

連れて出掛けられるものか。其こそ奥さんの手前もあるからね。」
「さう。」とお筆は腹立たしさうに言つて、「ぢやあどうすればいいの。」と暫く空中に物を求むるやうな眼つきをしてゐたが、火のやうに燃えてゐた其目から今迄に無い心の奥底からにじみ出たかと思ふやうな不覺の半がポロ／＼と零れて頬を傳ふた。余がはつと驚いて其を見守つた前にもう夕立のあとの碧空のやうに晴れ渡つた其顔には嘗て見なれた屈託の無いあばずれた色が動いてゐた。

「美しい涙だ。」と余は心のうちで思つた。何故に彼女がかゝる涙を零したかと云ふ理由を尋ねる前に、唯何となく美しい涙だと思つた。さうして先に乏しい虚飾の涙を愛惜した彼女が却て此心からの涙を自から耻づるかの如くに拂ひ去つた事を面白

く思つた。

「何を泣いたの？」と余が尙驚きの心を全く静めることが出来ずに聞いた。

「さう泣いて？」と彼女はごまかすやうに言つて、尙ほ頬のあたりに留まつてゐる一二滴の雫の上を其となく隠くすやうに手で壓へた。酒に燃えてゐる赤い頬の上にほつそりした手は白々と青みがしつて見えた。

「泣いたのでは無かつたの？」と余は微笑した。

「え、泣いたのでは無い笑つたの。」と快活に言つて、他に許り藝をさせて置いて黙つて見てゐるのね。人の悪い。」

お筆は余を前に置いた儘一人て酔ひつぶれつゝあつた。余は
九九三

其美しくしい肉團を唯不思議に眺めつゝ坐つてゐた。

「もうよしたらいいだらう。」

「厭！」と酔ふた女は首を振つたが其癖もう餘り飲んでも無く、酒のある上に注ぎ足さうとして壘を濡らしたりした。

「大分手許が怪しくなつたぜ。」と余は笑つた。

「さう。」とお筆も笑つて更に何か言ひさうにしたが止めた。

余は彼女の余に要求する處のものが決局何物であるかを諒解せんが爲に腰を落附けてゐたのであつた事を思ひ出した。余は斯る女の最後の要求が常に殺風景なる或一事に歸着することを熟知して居るが爲めに彼女の稍々人に異つたと見える表情の上にも餘り多くの價値を置くことが出来なかつたのであつた。けれども今日の前に在る酔つぱらつた女は尙さういふ容子を鶴の

毛程も出さうとはしなかつた。

金錢！。彼女は果たして其に冷淡なのであらうか。さういふ慾望は毫厘も無しに唯狂態を演じつゝあるのであらうか。其は解き難き謎として尙ほ暫く容子を見て居るより外に致し方が無かつた。

「もう解放されてもいいんだらうな」と余は戯談の様に言て歸り仕度を始めた。

「解放つて何！」とお筆は力めて醉態を隠さうとするやうに胸を搔き合わせるやうにして余の顔を凝視した。

「又逆戻りかな。」と余は苦々しく思つたが強ひて相手にせず、兎に角今日はもう歸らう。」と立上つた。

「いけないわ。」とお筆は止め様とするらしく手をあげたが立上

る勇氣は無つた。

「卑怯だわ」と纏れた舌で投げ出すやうに言つて又盃に手を掛け、もう其上は何とも言はなかつた。部屋を出る時振り返つて見ると余の方を見送らうともせず美しくしい櫛卷の中に指を割込むやうにして頭の地を搔いてゐた。

三十七

表に出るとまだ熱い日が傾きそめた許りであつた。余はいつも彼女に出喰はしたあとは漸く其手許を逃れ出たのをホツと安心するやうな心持がするのであつた。京城を去つて此地に来る時も、彼等の羈絆を脱すると云ふ事が矢張り一つの希望であつた

ともいへるのであるが、其が又た直ちに後を追うて來られて、附き纏はれる事になつたといふのは不愉快な事だつく／＼考へられた。其に何の爲めに執念深く附き纏ふのか明白に理解され無い限り愈々氣味の悪い氣が、りの事であつた。

「二三日前に船橋里へ誘つたのが悪かつた。」と後れ走せに後悔して見たりして、もう此上に成るべく近づかぬやうにしやうと決心した。

松田の事務所の前に通掛つて又聲を掛けて見たが、今度は宅にゐた。下の間には朝鮮人が二三人机を置いて鮮文の訴訟書類らしいものを験べてゐた。上れとの事で狭い段梯子を上つて見ると其處には寢臺もあり、長椅子もあり、狭い横長い室が其等の長大な家具で大方塞げられてゐた。

「君の來てゐることは洪から聞いたから一寸訪ねなけりやならんと思つてゐたところだ。」と景氣よく向ふから聲を掛けた。其癖口が少し重たさうで目が眞赤に充血して居るのは今晝寢の眞唯中を邪魔をしたのであることが判つた。

「斯んな狭いところで仕方が無いが其處に掛けてくれ玉へ。」と余を長椅子に座らせ自分は寢臺の上に腰掛けた儘其赤い目をこすつた。嘗て松屋の二階から定めて著いだらうと想像した事は間違つて居なかつた。窓には一面に日を受けて低い天井は頭の上を壓しつけてゐた。

三十八

宿に歸つて見ると妻はゐなかつた。女中のお花が敷居際に手を支へて、

「お歸り遊ばせ。」としとやかに辭儀をした。「奥様は先刻のお客様が是非とのお勸めてお客様のお宅へ御一緒にいらつしやいました。若し御用があまりでございましたら電話をお掛け申すやうにお約束申上げて置きました。」とお花は心得顔に言つた。お筆の所で長い時間を費した余は何となく心が尤めてゐたのであるが妻が出掛けてゐたといふ事は氣安いやうな心持ちがした。風呂を出て夕飯の時刻に迫つても妻は未だ歸つて來なかつた。其うち電話がかかつて來て、

「是非夜分迄話して行けと引とめられますの。どう致しませう。」と相談して來た。余はゆつくりしたらいいだらう。」と答へて遣

つた。

お花は夕飯のお給仕に来て行儀よく坐つてお酌をした。今日のお筆の事が時々思ひ出されるのを余は力めて忘れるやうにしつゝ、獨り静かに盃を取る快味を味つてゐた。其處へ、

「お客様がお見えになりました。」と一人の女中が報じて來た。

「誰？」

「府尹さんと大内さんとでございます。」

「食事中で失禮だが別の部屋へても……と躊躇してゐるうちにもう二人は這入つて來た。」

「府尹の松木さんです。」と支局長は紹介した。

「やあ、これは御食事中を失禮しました。」と赤味が、つた活動家らしい顔をした府尹は迷惑さうに坐つて、

「他の知人を訪問しましてね、玄關に掛つたところを大内君につかまつて文學者で非常な平壤最負の方があるからお目にかかつたら善からうと勧められましたものだから……とぶしつけない來訪を耻づるやうに又斯う言つた。」

「府尹には一つの平壤策があるのです。貴方が此間お話しになつたホテル設置論と吻合してゐるところもあつたものですからと支局長は新聞記者らしい口吻で附加へた。成程そんな事を一寸支局長に話したことはあるのである。」

「さうでしたか。私のは纏つた意見でも無かつたのですが……と余は少なからず恐縮した。」

「其處で貴方のホテル設置論といふのは？」と府尹は直ちに斬り込んで來た。」

「經濟上から成立ち得るものかどうか其點は全く不案内ですが、要するに平壤を一大公園として經營したらどうかといふのです。牡丹臺から大同江を通じ船橋里に至る景色は雄大で而も變化の妙を極め自ら大公園を爲して居る。安奉線も廣軌になり鴨綠江の架橋工事も出來釜山から長春迄汽車が直通するやうになれば、ゆく／＼は朝鮮は世界の大道となる其時分に其の沿線の平壤といふ所は風光明媚で日本政府も其處を世界的公園として銳意經營して居るといふことが判つたら世界の觀光客は必ず一度は平壤に足を止めるやうになる其處でホテル論になるのですが、ホテルも大同江の水を中心として計畫すべきは勿論の事で先づ一番の好地位と考へるのは綾羅島ですな。あそこに大きなホテルを作つて夏はヨットを江上に浮べて自由に綾羅島の周囲も回れば

船橋里、鍊光亭、大同門のあたりを上下する。冬は又結氷を利用してスケーティングを遣り、江上の往來には雪車を使ふですな。春秋は勿論夏冬共に相當の設備さへ出來れば却つて變化に富んだ面白い遊覽地となることが出來るだらうと考へるのです。汽車の停車場を江岸迄延ばせ、其停車場とホテルの間に美しい連絡線を作つて旅客に少しの不便をも感ぜしめぬ許りか、長途の汽車旅行の客を忽として輕快なる船中の客と化し二三分間にして水中の宮殿ともいふべき綾羅島のホテルに導くやうにする事は面白い事では無いでせうか。これがホテル設置を第一の急務とする私の平壤策です。」と汽車が江岸で客を吐き出してゐたり、ヨットが直に其客を收容して動き始めうとしてゐたり、白い石造のホテルが何間かの窓を灯し運んでゐたりする光景を目の前に髣髴

しつゝ余は話した。さうして平壤といふ土地に存在するであらう多くの事情は一切問はず、又斯く成就する迄に費すべき時間を考へず一畫圖のやうに其光景を描き出して見る點に興味を持つた。けれども全く文學者の空想論かも知れんです。と實際さう考へた事を正直に附加へて余は笑つた。府尹は存外眞面目に一々點頭いてゐたが、

「私も矢張り平壤公園論者であつて、其點は全く貴方と一致して居るが綾羅島にホテルを作るといふ事は結構には相違無いが實行上困難なことのやうに考へるのですな。船といふやつが旅客に取つては何となく億劫に感ぜられるもので、矢張り馬車とか自働車とかで短時間に着く事の出来る邊にホテルを造る方がよからうかと考へるです。勿論大同江を閑却して市中に造るといふ

譯では無く大同門鍊光亭あたりと並んだ矢張りあの江岸に作るですな。ヨットを浮べスケーティングを奨励する點も勿論異存はありません。尤も其等は經費の問題ですけれども、兎も角一個のホテルを作るといふ事は左程困難の大事業とも考へ無いのです。尤も平壤府だけが獨り意氣込んでも駄目な事で、少くとも鐵道院あたりで其氣になつて貰んと駄目ですからな。」と府尹は其赤顔に何等かの不満らしい色を浮べた。

「其は無論ですとも。私は國家事業として造るが、いゝと思ふ位で一方からいへば朝鮮鐵道の一經營策ですからな。」と余も相槌を打つて存外當局者としての府尹の意見と余の空想論との距離の近いの不思議に思つた。けれどもホテル設置の位置として綾羅島を逸することは余の空想の半ば以上を破壊されるやうに

思はれて不愉快であつた。これは是非共其處迄思ひ切らねば折角の平壤ホテルとしての特色を充分に保つ事が出来ぬ船の往來も遣りやうによれば決して乙構で無く却て其が呼物になる譯だと考へた。

余が私は國家事業として遣るが、と思ふ位だ云々と言つた時、府尹は笑つた。けれども其笑は人の心を傷けるやうな笑では無かつた。余の説を實際に疎い説として輕蔑するといふよりも寧ろ其處に興味を持つたやうな笑であつた。其から話を外に轉じて、
「先夜はカルボアの御探檢だつたさうですな。」と又快活に笑つた。

「カルボアだかサンペーだか知りませんが大内君に案内して貰つてもう大分平壤通になりました。」と斯う余も笑ひつゝ話し乍らふと思ひ出した事があつた。

「此方にも妓生學校があるさうですな。」
「ありますとも。こちらのものに言はすと平壤が妓生の本場な
んですからな。」

「其處で又話がもとに戻りますが、已に妓生學校なるものがある以上は妓生を今少し世界的のものに教育して日本語は勿論の事一二の外國語も話せるやうにし大同江に妓生船を浮べ舟中に糸竹管絃の樂をも奏すれば妓生踊もやるやうにさせてはどんなものですか。それから先にヨットと言ひましたが、あれは取消して、ヴェニス Gondola とか秦淮の華舫とか言たやうな具合に此

の江山に調和した一個特別の船を創造するですな。之は當局者に其考へさへあれば左程むづかしい事でもあるまいと考へます。がどうですな一つ御奮發なすつては？」と余は酔に乗じて又平壤策に逆戻りをした。

府尹は又快活に笑つて、

「さあ一つ奮發しますかな。其處迄行けば萬景岱も閑却することは出来無い。ねえ君萬景岱は是非其平壤策のうちへ計算に入れねばならぬね。」

「さうですとも萬景岱は是非入れる必要がありますね。」と支局長は相槌を打つた。

「萬景岱といふのは？」

「こゝから三里許り川下になるのです。」

「唯例の瀬に困りますね。」と支局長は其計畫を眞面目に考るものゝ如く言つた。

「瀬なんか君何でも無いさ。浚渫をやればいゝぢや無いか。」と府尹はもう實行上の問題として考へては居らぬらしかつた。けれども何處迄も人を輕蔑したやうな口吻は見せなかつた。

「鎮南浦から萬景岱迄は千早位な軍艦は上るのですが其上流になると瀬が澤山あつて干潮になると韓船の交通にも困難する位です。」と支局長は説明した。

「さうでせうね。實行となると其な問題が幾らでも起るでせう。」と余も稍々勝手が違つて調子を鈍らせた。

「綾羅島の近傍にも困難な奴があるね君。」

「さうです。」

「矢張瀬ですか。」

「さうです。浚渫を遣る事になつてはゐますがね。なか／＼困難らしいです。其も經費の問題でしてね。」と府尹は苦笑した。余の空想畫はだん／＼遠くの方に消えかゝつてゐるやうな心持がした。府尹は急に話を轉じて、

「この向ひの部屋であつたと思ふ。あの沼田がゐるのは？」

「たしかさうでした。」と支局長は答た。

「あゝさうでした。たしか沼田さんと仰しやつた、あの小柄な人でせう。」

「さうです。あの男は不思議な男で、江原道平安道は到る處に鐵山があるといふ或人の演説を聞いてから殆ど二年間毎日のやうに鐵槌を腰にして山中を經めぐり、岩角をコツ／＼と遣つて歩いて

た男で、到頭一つの炭鑛にぶつ／＼かつたですな。」と府尹は其實際家らしい活動的な顔に會心の微笑を浮べた。

府尹の平壤公園論も、其沼田氏とやらが鐵槌を以て一々岩角を缺いて歩く程では無くとも、矢張り足の地に着いた實際論である事は想像に難くなかつた。けれども余の頭には今話し乍ら思ひついた華舫のやうな特別の舟のことが暫くの間つき纏つて離れなかつた。其は自分乍らよい思ひつきのやうに思はれた。現實より唯一歩を先んずることを目的とする實際論から見たら斯の如きは不急の末事と考へられるであらうけれども決してさういふ譯のものとは考へ無かつた。江山に精神があるといふ事をよく人はいふが其は江山と人間との間に存在するものであつて、江

山にのみ存在するものには無い。さういふ場合に人はよく社を作つたり鳥居を建てたり碑を刻んだり橋を掛けたりする。其は其の江山其ものと人間との間に存在する感情を具體化したものである。秦淮の華舫の如きは其が更に一步を進めたもので秦淮なるもの、或感じが人格化されて華舫になつたのである。墨染櫻の精が遊女になつたり柳の精が柳に成たりするよりは遙に進歩した且つ自然な人格化である。之を社會的にいふと政黨とか結社とかいふやうなものに主義綱領といふやつがあつて旗幟を鮮明にし人をして據る處あらしめやうとする如く華舫は亦秦淮の主義綱領である。近い處でいへば煉光亭の下に在る大同江祠や牡丹臺下に於ける永明寺浮碧樓、お牧の茶屋船橋里に於ける楊柳の如きものも大小の差こそあれ皆人格化であり旗幟である。

即ちさういふ意味に於ける一種の船を大同江に浮べるといふ事はこの江山を天下に比類少きものとして自から矜誇するところのものを鮮明にするのである。主義綱領を提示するのである。決して不急の末事で無いどころか、非常なる急務ともいへる……とそんな事を考へながら余は府尹と支局長との話を黙つて聞いてゐた。二人の話は沼田氏が例の鐵槌と握飯とを腰にして山中をうろついた當時の逸話などであつた。

其處へ、

「お客様がお見えになりました。」とお桂さんが知らせて來た。

名刺を見ると鶴見慶之助とあつた。

「其に一人御婦人の方も御一緒にございます。」とお桂さんは附加へた。

慶之助の連の女といへばお筆である事は考へる迄も無かつた。困つたなあ。」と余は心の中で叫び乍ら今は來客中だから明日でも來るやうに言つて呉れんか。」とお桂に向つて言つた。

「僕等こそ何も用事は無いんだから御暇にしやうぢやないか。」と府尹は支局長を促してもう立掛けさうにした。

「そんなたいした客では無いんです。」と言つて余は打明けて話した。

「あの女は面白い女だ。」と支局長は獨言のやうに言つて、「お通しになつたらいゝでせう。」

やがてお桂に導かれて來た慶之助の後には果たしてお筆が立つてゐた。慶之助の頭に半分顔を隠くすやうにして、片方の眼に媚を含んで余の方を見た。余は先刻のやうな狂態を演ぜらるゝ

事を何よりも恐れてゐたのであつたが、さういふ模様は見え無かつたので安心した。

「いつ來た。」と余は府尹などに紹介してから慶之助に聞いた。

「本日參りました。」

「さつき見た新聞には明日から開場のやうに書いてあつたが確に稽古もしないで始めるのかな。」

「私は例の通り遊軍ですから。其に春尾の代りには一人新に加入しましたから。」

「其ては當分作者専門かね。」

「まあさういつたやうな譯です。」

余と慶之助とて斯んな話をして居るうちに、お筆は支局長と話してゐた。

「あれから何處か御見物でしたか。」

「いゝえ。」とお筆は言葉少なに答へてつつましやかに控へてゐた。お筆の注意は今新たにシガーをくはへて黄色い煙を棚引かせてゐる府尹の上に乗まつてゐるらしかつた。

「まだ牡丹臺へも行かないですか。」

「はい、まだ。」とお筆は何處迄も口敷を少くして其癖いつもの大きな眼に一杯の媚を支局長の顔に浴せ掛けてゐた。

「鶴見君は平壤は初めてかね。」

「はい、初めてです。」

「なか／＼いゝ處だよ君僕は一度見たさきりですつかり平壤黨になつてしまつた。其に是非牡丹臺の掛茶屋に休み玉へ。其處にお牧といふ素的な美人が居るから。」

「あのお牧といふ女は變つた女です。」と府尹も言葉を添へた。
「お筆さんが何方が美人か比べに連れてつて呉れと言つてゐるから君連れてつて遣り玉へ。」と余は笑ひ乍ら言つた。府尹等も笑つてお筆の顔を見た。

「あら、随分ね。」とお筆の眼は忽ち燃え立つた火のやうに輝き初めて少し許り燈火の前ににじり出てお花のあつけに取られてゐる膝元の銚子を取つて府尹や支局長などに酌をした。

松屋は藝者は一步も門内に入れぬことになつてゐた。客を送つて來た藝者も客がいくら這入れと言つても、黙目よ貴方、こゝはお女將さんが喧しいんだもの。」と言つて皆門前から引返すのが常であつた。初めからお筆の容子を變に思つてゐたお花は穩かならぬ顔附きをして其の一舉一動に注意してゐた。

余はあきくしたお筆の嬌態を又見ねばならぬ事かと不快に思つてゐたところへ更に二人の來客があるとお臺さんは報じて來た。其は松田と洪さんとであつた。

二人が座敷に通つてから折角にぢり出てゐたお筆もいつの間にか手持無沙汰にもとの座に引下つて又つゝましやかに控へてゐた。洪さんも松田も府尹とは已に知り合ひの間であつたが別に話ははづまなかつた。唯松田は時々お筆の方を不思議さうに見た。

お花は時々銚子を代へに立つたがだらだらとした酒に誰も餘り酔つたやうな風も見えなかつた。余も一旦酔ふた酒がまた醒め掛けて私に欠びさへ催ほされた俄に引立たなくなつた此の多

人數の會合を余は唯不思議に眺めてゐた。さうして、

「お筆さん少しはしやいてはどうかねとからかうやうに言つて見た。お筆の時々偷見るやうに眼をやる府尹の顔のあたりには例の黄色いやうな白いやうな煙が力強く棚引いてゐた。

「大變今日は眞面目でございますね。」と洪さんも例の皮肉な口許を動かした。けれどもお筆は冷かに笑つてゐる許りて何とも言はなかつた。

「此前清涼里へ行つたものが不思議に皆此處へ集まつたのでございますね。」と洪さんは又ぢろりとお筆や慶之助の方を見た。

「まだ何といつても朝鮮は狭いな。京城で逢つたものは大抵又平壤で逢ふやうになるね。」と余は言つた。

「内地から來る人はよく其事をいふのです。兎に角一條のレ

ルが唯一の交通路ですからね。」と府尹も亦た口を挿んだ。
「殊に大概な人は此松屋に來ますからね、自然此處に落合ふやうになるのです。」と支局長は言つた。

「實際平壤には旅人宿が少ない。」と松田も相槌を打つた。
そんな話をもとになつて、又府尹の口から余の平壤策が皆に吹聴せられた。

「まあ君今一月も滞在して大同江が汎濫する平壤が半以上海になるといふところを見るさ。」と松田は絶望したやうに言つて笑つた。

「要するに經費の問題さ。」と府尹は調停するやうに言つた。
併し妓生船はいゝね。其だけは早速府尹に實行を迫らうぢや無いか。」と松田は又笑つた。

けれども皆餘り笑ひもしなかつた。相變らず話に油が乗らなかつた。其時お筆は突然、

「ねえ貴方がた。私其お牧さんとかの茶屋へ行つて見たいわ。連れてつて下さいな。」と誰にいふとも無く、退屈したやうに、甘へた調子で言つた。

これが南山樓に於ける石橋剛三の一座であつたら、行き度けりや一人で行くさ。」など、剛三は素氣なく言つても、いつの間にかお筆を中心にして多くの取巻きの運動が直ちに開始されるのであるが此席に於ては誰一人其言葉に答へるものすら無かつた。
例の府尹の葉巻は相變らず其赤ら顔のあたりに渦巻き、洪さんは悲惨な口許を閉ぢてゐた。

お筆の顔には今迄に見ることの出来無かつた一つの表情が現

はれた。其眼には鋭い光があつて少し青味が、つた顔には筋肉の微動が見え其をつとめて隠さうとする口許の微笑は恐ろしき迄に冷かであつた。

「大内君此間の晩は下人の役が滞り無く務まつたかね。」と洪さんは俄に思ひ出したやうに落着いた皮肉な調子で言つた。

「失敬なことをいふ。」と支局長は慌てたやうに言つた。

支局長が片手にステッキを突いて片手に提灯を提げ案内者顔に先に立つた處は面白い圖であつたといふ事を洪さんが詳しく説明したので府尹も松田も笑つた。

「例の探検の時です。」と府尹は煙を吐き乍ら又笑つた。

「僕が其提灯を提げてゐる手の方を握られて大に苦戦をしてゐる處をお筆さんに救はれたです。」と支局長もせうこと無しに笑つた。

つた。

「斯んなに二人で遣つてらつしやるんですもの。」と此時お筆は忽ち普通の快活な顔に戻つて自分の右の手首を左の手で握つて其時の容子をして見せた。其がいかに生き寫してあつたので余も支局長も覺えず笑つた。他の人人も一度に笑つた。お筆の手真似はしつこく無く、はつと目をとめた間にもう柔かく其をほどいて自分もをかしさうに笑ひこけてゐた。簡単な物真似にこの邊の藝者などに見ることの出来ぬ手の汗へを見せたので府尹も松田も心を牽かれて見た。

この人は
アハハハハ
アハハハハ
アハハハハ

其翌日は早く夕飯を済ませて、日が西に落るか落ぬに妻と二人で大同江に船を浮べた。いつ来て見ても新たに來たやうに其廣々として雄大な景色に打たれた。船頭は初めて牡丹臺から漕ぎ下つた時の日本語の巧みな例の岩吉であつたので今日は又牡丹臺に漕ぎ上らせることにした。妻は別に多く喋るでも無く唯黙つて舷に舷をもたせてゐるのであつたが其が我妻乍らいかにも貴いやうに眺められて今迄何處かを遊覽するといへば必ず他人を交へたことを後悔するやうに覺えた。

「いつ來て見てもいいな。」

「昨日のやうに窮屈な暑くるしい思ひをするより幾ら樂ですか。」と妻は心持ち膝を崩して、此舟中の小天地を樂しむやうに見えた。「己も昨日は随分閉口した。」

「お容様も多勢一時になると本當に困りますわね。」

或中心があつての會合だと多勢もいゝが、何組もの客が落合つたといふやうな時は全く困るよ。」と斯んな話をし乍ら昨日午前お筆の宿に行つたことはまだ妻に打明けなかつた。

二人は又黙つて水面を見た。櫂の音が耳に響いて軽い舟がすべるやうに進む。

「上げ沙かね。」

「さうです。」と岩吉は幾度聞いても日本人と同じ輕快な調子で答へた。

例の大同門や鍊光亭はいつの間にかあとになつて玉流屏も過ぎもろ綾羅島が見え始めた。余は昨日府尹に話したホテルの話を妻にした。

「どうだ二人でホテルでも始めるか。」

「いゝわねえ。」

二人は人事のやうに話し合つて笑つた。昨日府尹に話した時のやうな熱心な論者の口から斯んな餘所くしい言葉が出る事を自分乍ら不思議に思つた。

黙つて此話を聞いてゐた岩吉は、

「旦那綾羅島の地面をすつかりお買ひになつたらいいでせう。」

「綾羅島の王もいゝな。」と余は笑つた。

いつかもう牡丹臺は目の前に聳えてゐた。浮碧樓や永明寺やお牧の茶屋も手に取るやうに見えた。

「お牧さんゐるんでせうか。」

「ゐるだらうとも。」と二人はこんな問答をした。

岩吉を待たせて置いて、二人は草の生えた半ば崩れたやうな石段を登つて行つた。

今登りつゝある路を此前は下つたのであつたが、かゝる石段のあつたことは記憶に残つてゐなかつた。大きな石のぞんざいに積まれたのが歲月を重ねて愈々不規則になつてゐること、傾斜の急なことが此石段の著しい特色であつた。こんな段なら此前の時確と頭にとゞまるべき筈だと思はれるのに毫末も記憶になかつた。

「こんな段があつたのかな。」

「私も覚えてゐませんわ。」

「けれども他に路は無いんだからな。」

「さうですとも現に今通つたあの門をくゞつた事はたしかに覺え

えがあるんですもの。
併し此際斯ういふ石段を登るといふ事に格別の興味があつた。
或人を師匠に持つた弟子が其師匠を自分一人のものゝやうに考へて其師匠の細君に對する愛情迄を嫉視するやうな例もよくあることである。一人の役者を敵負にしてゐる女が其役者の舞臺に演技してゐるのを自分一人の誇のやうに考へることは有勝の事である。其のみならず世間の多くの女は自分の亭主の肉體も精神も自分一人の爲めに存在してゐるものゝ如く考へてゐるのである。之は熱愛である。戀である。余の牡丹臺に對する嘆美の情も稍々之に近いと言つてよい。
唯一度見た許りの牡丹臺を二度目に訪ふ今もう自分の爲めに



のみ存在してゐる天地に足を踏み入れるやうな心待てゐることに氣がついて余はをかしく思つた。其も余の心がか妻も同じやうな心持てゐるらしく得々として段を上りつゝあるやうに見えるのも亦たをかしく思はれた。
牡丹臺は又直ちにお牧の茶屋を連想せしめた。彼女の明眸皓齒が人の心を牽くとか其賊と奮闘した話が心を躍らせるとかいふ事以外に此牡丹臺を背景にし

たる霞簀茶屋の女主人として特別に尊敬の念を拂ふのであつた。此心も亦た余と妻との間に大いなる相違が無いやうに見えた。

段を登り詰めると空濶な臺地に出た。これは固より覺えのある臺地であつた。浮碧樓は右手に永明寺は左手に、お牧の茶屋は其中間に在つた。

霞簀茶屋には舊の如く赤や青の手拭が下つてゐた。縁臺が置き並べてあつた。けれども人影が見え無かつた。お牧らしい女も居ず此前見た亭主も見えなかつた。

「おやお牧さんゐないらしいわ。」と妻が失望したやうに言つた。「誰かゐないことは無いだらう。まあ浮碧樓の方に行つて見やうぢやないか。」と余は其方に歩を移した。妻もついて來た。

大同江に船を浮べる時、いつでも其川幅の廣いのに驚かれる如

く此處から見下ろす景色の雄大さも此程であつたかと新たに嘆美さるのであつた。綾羅島も大きい中洲だとは思つてゐたが、此程迄に大きからうとは思はなかつた。以前見た時は一面に青い麥圃と岸の楊柳とであつたが、今日見るとところ／＼に百姓家が點在してゐて楊柳は岸許りで無く其百姓家の周圍にもあつた。「どうかお休みなすつてゐらつしやい。」といふ聲が後ろで聞こえた。其はお牧さんの聲では無く、濁つた男の聲であつた。ふり返つて見ると髯の立派な鼻の低い額の狭い眼鏡を推けた、此間は板屋の中で俯向いて仕事をしてゐたお牧の亭主であつた。彼は不器用に腰を屈めて、「お休みなすつてゐらつしやい。」と又くり返した。

我等夫婦が縁臺に腰かけると亭主は無器用な手つきで茶を酌んで持つて来た。

「今日はおかみさんは居ないんですか。」と聞いて見た。
「一寸今裏で薪を割つて居ります。」と亭主は答へた。

「まあ。」と妻は驚いたやうに軽く言た。此武骨らしい亭主が薪を割ら無いてあのお牧が割つてゐるといふ事を余も面白と思つた。さう聞いてから氣をつけて見ると板屋の裏に當つて鉦の音が聞えた。

亭主は尙ほ武骨らしく手をもんで、

「どうも晝間は暑いことで……」などと挨拶をした。この前も牧の店にゐた時は彼は唯板屋の中に坐つてゐる許りであつたのが今日はいかにも茶店の亭主らしくつとめてゐるのをかしく

思はれた。

「君等は四年前に此處に茶店を出したといふ事であつたが其前は國にゐたのですか。」

「いえ私は……と彼は耻しさに頭に手を遣つて、もう其前十年餘りも朝鮮や満州あたりを經めぐつて居りました。」とさう言つてから又兩手を揉んだ。

「此男も矢張り豪傑のなれの果かな。」と余は考へ乍ら、

「さうですか。其はいろく面白い話があるでせう。」

亭主は又耻しさに黙つて頭に手を遣つたが其が決して上面許りで無くいかにも心から恐縮してゐるらしかつた。

「満州では宿屋の主人などにも大分志士を以て任じてゐる人が多いといふ事を聞きましたか……」

「さういふ方もあります。」と言つて亭主は又手を揉み乍ら満洲の方へもお出でになりますか。」

「行つて見度いとも思つてゐますが……。」

「一度は御出になるのも面白うございませう。」

余はふと剛三の事を思ひ出しつゝ、

「君石橋といふ男は知りませんか。」と何気なく聞いて見た。

「石橋剛三でございませうか。」

「さうです。」

「知つて居ります。」と亭主は無造作に答へた。さうして怪しげに余の顔を見つゝ、

「貴方も御存じてゐらつしやいませうか。」

「よく知つて居ります。此間京城でも一緒の宿に居りました。」

「それでは……。」と亭主は余の姓名を言つて「貴方てゐらつしやいませうか。」

「さうですが、どうして君は其を。」

「石橋は昨日此處へ参りまして貴方のお話をして居りました。」

「石橋がですか。」と余は驚かざるを得かつた。

「まだお逢ひになりませんか。」

「逢はないどころですか、京城で別れた切りなんですが……。」

「何でも少し秘密な用事があつて、今迄誰にも居所も知らさ無かつたといふ事ですが、もう其方の用事が片づいたやうに話して居りました。」

「いつこちらに來たのですか。」

「まだ間も無いのでございませう。一寸京城に歸つてから今度

は表立つて満洲に行くことにしたとか言つてゐました。

「以前は殆ど失踪したやうな形でしたかね、其では矢張り満洲に行つてゐたのですか。」

「別に詳しい話もしませんが、無論さうでございませう。」と言ひつゝ、亭主は土瓶に湯を注すべく立上つた。さうして、

「粗末なお菓子許りで……」と言ひながら又無器用に妻に會釋をした。妻はあつけに取られて亭主と余の顔とを見比べてゐた。銀の音は尙ほ聞こゑつゝあつた。

石橋剛三！。彼が今平壤に在るといふ事は流石に驚かれた。

満洲に行つたものとは略々推量してゐたのであるが、其がもういつの間にか此地に現れてゐるといふ事は意外とせなければなら

なかつた。彼は何の必要があつて秘密に満洲に行つたものか、さうして今は又平氣で此邊をのさばり歩いてゐるものか、其邊の事情に暗い余には凡て不可解であつた。

「本當でせうか。」と妻は尙ほ怪しむやうに言つた。

「眞逆うそももあるまい。」と答へ乍ら尙ほ余の頭にも三分の疑ひをとめてゐた。亭主は片手に蓋を明けた儘の土瓶と片手に其蓋を持つて板屋を下りて來た。

「石橋は何處に泊つてゐますか。」と亭主の近づくのを待つて余は尋ねた。

「花屋でせう。」と亭主は我等に茶をすゝめ乍ら答へた。

「花屋？」と余は又た驚かざるを得なかつた。現に昨日余は花屋に行つてお筆の狂態に難まされたのでは無かつたか。其時石橋

の事を聞いたのに對してお筆は何の便りも無いと返答へたのは無かつたか。其は餘りに信用の出来ぬ言葉だと思つた。

「昨日お筆さんが來た時に何の話も無かつたんですか。をかしのねえ。」と妻も不審の眉を寄せた。

鉦の音はいつの間にか止むてゐた。

「いらつしやいました。」と板屋の陰から現はれつゝ明瞭した眼つきをして我等に挨拶したのはお牧さんであつた。

我等は一度見た許りて牡丹臺の景色の嘆美者になつたといふ事を話し。

「其にねえ、お牧さんにもすつかり惚れちやつたんですよ。差支無いてせう、夫婦で惚れたんだから。」

「いやですわねえ。」と妻はたしなめるやうに言つて笑つた。

「結構ですわ。」と言つてお牧はあざやかに笑つた。

一匹の蝙蝠は浮碧樓から出て江の空に飛んだ。浮碧樓に蝙蝠のゐた事は思ひ出さうともせずにお牧さんのであつたが此前見た光景を又繰り返して見ることを面白く思つた。周囲の景色も此前來た時の時刻に近づいて來て、何處となく黄昏らしい色が認められた。亭主のいつの間にか板屋に這入つて俯向いて何かをしてゐるのも嘗て見た景色であつた。

「始終住まつて居りますと、さういゝ景色とも思ひませんですが。」と言ひつつ、お牧は後ろの高い牡丹臺の尖角を見上げた。

我等の乗つて來た船の岸に繫がれてゐるのが小さく見下ろされた。船頭の腰をかけてゐるのも略其らしく想像された。けれ

どもよく見ると同じやうな船が他にも一艘あつて、同じやうに船頭は腰を掛けてゐた。最前我等の來た時は自分の船一艘ほか無かつたやうに思つたのに不思議にも同じやうな船が二艘見えるのであつた。たゞよく氣を附けて見ると一人の船頭の頭はたしかに散髪であるが他の一人の方は鬘があるやうに見えた。いつの間にか別に一艘の船が來て其處に繋がれたものと見えた。

余が妻に其事を話してゐると、お收さんは、

「あれも九曜館の船ですわ。矢張りお客様を乗せて來たのでございませう。」と云つた。其時石段の方に當つて二人の男女の頭が現はれ、續いて又一人の男の頭が現はれた。

「あゝ噂をしてゐたら石橋さんですよ。」とお收は言つた。

「さうだ石橋だ。」と余も覺えず言つた。

「其にお筆さんと……」と言ひ掛けて妻は遅れて登つて來た一人の男を不思議さうに見た。

「お前に話したことがあると思ふ、あの男が壯士俳優の鶴見慶之助だよ。」と余は妻に教へた。斯んな話をしてゐるうちに三人は此方に近づいて來た。

「まあ、兄さんに奥さんだ。」とお筆は走り寄つて來て、貴方所をお誘ひしたのだわ。」

「まあ、さうでしたの。失禮しましたわねえ。」と妻は嬉しげに立上つて迎へた。

「やあ」

「やあ。」と互に言葉を交はしつゝ、余も立上つて剛三の方へ近づいた。君の來てゐることを今此處で聞いた處なのだ。此地に君

がむやうとは意外であつた。

「さうだつたらう。少し都合があつて何處にも知らさなかつた

ものだから。」と笑つて今朝洪にも逢つたよ。

「昨夜も話しに来て置き乍ら石橋君の來たことを何とも言はなかつたのはひどひね。」と余は筆をなじつた。

「だつて兄さんのところから歸つて來て見たら石橋の兄さん來てらつたしんですもの。私もびつくらしたのよ。」

「昨日此地に來たのだが一寸川事があつて他の家に一泊して、友人と一緒に一日此邊をうろつき夜になつて初めて花屋に行つたのだ。」と剛三も附加へて言つた。

「其で長く平壤に滞在する積りかい。」

「さう長くはゐられまい。」

「京城に歸るのかい。」

「はつきりは判らぬが多分滿洲に行く事になるだらう。」

「さうか。」

余は筆の上にかゝつてゐた疑問が一時に氷解したやうに思はれた。筆の此地に來たといふ事も何も深い意味は無かつたので矢張剛三と一緒に滿洲に行くといふに過ぎ無いのであつた。此時ふと氣がついて見ると筆の右の中指にはまぶしく光つてゐるものがあつた。これは嘗て南山樓の浴場で彼女が流しに俯向けてある桶の底の上に置き忘れてゐたものに相違無かつた。此前逢つた時も昨日あつた時もたしかに其は眼にとまら無かつた。剛三の來た事と其指環の指に戻つてゐることゝも略ぼ其意味がよめるやうに思はれた。筆が余に要求する處のものを金

錢かとも疑つて見た事があつたが其も當つてはゐなかつた。剛三の手には我等の想像のつかぬ方面から私に支給されるものがあるのであらう。

剛三を見ると一番に思ひ出すのは清涼里の事であつた。其夜の事を話し始めると、

「其事は洪にもお筆にも聞いた。全く失敬したよ。あの晩或友人の所によると一刻も緩うすることの出来ぬ事件が持上つてゐたので、すぐ其足で奔走を始めたのだ。」

「あの日に満洲へ出發したのかい。」

「なに満洲に行つたのは二三日してからであつた。けれども少し秘密を要することであつたから、もう宿にも歸らず一二の友人

の外には居所も明かさず、到頭其儘になつてしまつたのだ。」と剛三は言つた。

「初めは心配したけれどもお京はじめ皆存外平氣だもんだから何か理由があるのだらうと思つて僕も其儘にしてしまつたのだ。」

「南山樓では馴れてらあね。」と言つて剛三は笑つたが其に附いてお筆も笑つた。

余はそんな談話をし乍らも興味は其方に無かつた。お筆は最前から屢々其大きな眼を瞠つてお牧の方を見たがお牧は此茶屋の女主人として凡での責任を一人に背負つてゐるやうに萬遍無く愛嬌を振り撒いてゐた。慶之助が一人ぎごち無く傍に腰掛けてゐるのを見て彼女は其方にも愛憎をした。

「おかみさん、もう此處に永年ゐらつしやいますんですつてね。」

とお筆はお牧の美しい眼と歯とを見た。お筆の眼には此の江山の晩景は芝居の書割程にも其注意を牽かぬらしかつた。

「さうでございますよ。足掛け四年になります。」

「でもよくね。」とお筆は憐れむやうな目つきをした。お筆に取つては其明眸皓齒は嫉ましからうが其境遇は羨ましいもので無かつた。人間の氣と夜とのあるところなれば如何なる果迄も放浪して見やうとするお筆に取つては此江山の一隅に繋がれてゐるお牧は憐れむべき女に見えたかも知れなかつた。「逆ても私等には辛抱は出来ませんわ。ねえ奥さん。」と妻をも無論自分の仲間と信ずるものゝ如く話し掛けた。

「さうですともねえ。」と妻はいつも繰り返す心からの感動を表した。さうしてお筆さんあちらへ行つて御覽にならなくつて、

と促すやうに言つた。

「私も御一緒に参りませう。」とお牧は先に立つた。

三人の女は僅に違ふ背丈を並べて夕闇の棚引そめた浮碧樓の方へ歩みを運んだ。

三人の女は略釣り合つた背丈をして浮碧樓の外れに立つてゐるのが茶店の床几から遠望された。真中に立つてゐるのはお牧であつて流石に主ぶつて何かと説明の任に當つてゐるらしいのがよく見えた。妻はお牧の手の向ふところ顔の向ふところに素直に振向きつゝあつたが、お筆は一人思はぬ方向を見てゐることもあつた。江山を一人て背負つてゐるお牧と氣紛れに天下を横行しやうといふお筆と常に周囲の事情に支配されて行く妻との

對照が影繪の如く面白く眺められた。

こちらには又天下の志士を以て任ずる剛三革命談のうち在りさうな茶店の亭主放浪生活を試みつゝ意氣地の無い慶之助等の對照も面白く考へられぬても無かつた。さうして我等夫婦を除くの外は此牡丹臺といふやうな處を背景にして立つてゐるのに孰れも相應しい人々だとかしく眺められた。

暫く黙つてゐた後余は慶之助に言つた。

「君はいつ迄此方にゐるかね。」
「芳美團は都合によつて此處を打上げてから解散することになりさうです。私には石橋先生に満洲へ連れてつて載かうかと思つてゐるのです。」

「満洲に行つてどうする積りかい。」

「あちらの新聞通信員に知つたもも居りますし、又安東縣へ行つても奉天へ行つても私等仲間のものも居りますから。」

「矢張り放浪生活の興味といふやうなものが忘れられないのだらう。」と余は笑つた。

「え、まあさうですな。」と慶之助も淋しく笑つた。

「其なら満洲にでも奉天にでも行くがいゝだらう。實際さういふ生活も面白いものだらうと僕も略々想像がつくよ。其代り自分の生活は悲惨だなど、泣言は言はぬ方がいゝだらう。」と余は大郎て彼の言つた言葉を思ひ出した。

「けれども其悲惨だと感じるうちに誇もあれば慰藉もあるのですからな。」

「其もさうだらう。さう悟つてゐるのなら其でいゝよ。」

其處へ三人の女は此方へ歸つて來た。妻は近づきつゝ笑ひ乍ら斯う言つた。

「今お筆さんが面白いことを仰しやつたんですよ、三人であの崖から下へ情死をしないかつて。」

其時同じく笑ひ乍ら此方を見たのは明るい透き通つたやうなお牧の眼と沼のやうな大きなお筆の眼とであつた。

四十一

其から又二三日経つてからの事であつた。誰の發起といふ事も無く大同江に大きな船を浮べて酒肴をも満載し別の小舟に妓生や樂人を載せ舟中に樂を奏し演舞をさせつゝ江を漕ぎ下つて

萬景岱に迄行つて見やうといふ事が突嗟の間に成立つた。其妓生舟を浮べるといふ事は嘗て余が府尹に話した平壤策中の一部分が試みに實行されるものらしく誰人の口から獻策されたものかは知らなかつたが余は特に賛成を表した。

扱其用意が大變であつた。妓生舟に關する一切の準備は洪さん料理は松屋に、船の事は九曜館に一任し幹事には支局長を推す事にした。

折節松屋には客が少なかつたので、女將は快く引受け萬事行届いて準備をして呉れるらしかつた。尤も剛三は今度は或都合の下に花屋に泊つたけれども元來が松屋黨で殊に女將とも古い馴染であつたので、

「女將さん頼むよ。」と彼の口から手軽く頼んでしまつたのであ

つた。

「御馳走の準備が大變だね。」と座敷に來たお桂にいふと、
「何にせよ多勢様だもんですからねえ。」とお桂は笑つた。
「何人位になるのかい。」

「旦那様も御存知無いですか。」
「知らないよ。」

「大内さんに伺つても其度々に變るのですよ。」

「府尹も行くのかね。」

「多分いらつしやるんでせう。」

「さうするといろんな人が行くことになるね。お牧さんも連れて
てくんだと大内君が言つてゐたが……」

「お牧さんと仰しやるのはあの牡丹臺の茶店の？」

「さうさ。」

「何でも是非引張つて行くんだとか仰しやつてゐました。」

「其處へお花は電報を持って來た。見ると大邸のお久さんから
今日着くといふ簡単な意味の通知であつた。お久さんの主人が
舊義州の方へ轉任になつたのでお久さんも其あとを追つて近日
出發するといふ事は前以て報知があつたのである。」

「丁度いゝぢやないか。其てはお久さんも明日は引張つて行く
ことにするさ。お桂さん又僕の方で一人殖えることになつたよ。
承知致しました。」とお桂さんは引下つた。

「お花さん明日一緒に行かないか。」

「有難うございます。」とお花さんは例の通り迎ても駄目とあきら
めたやうな返事をする。其處へ又一人の女中が知らせて來た。

「大内さんから電話でございます。」

早速電話口へ出て見ると愈々明日の午前九時迄に例の税関横迄行つてくれ税関長も同行することになったから税関長のうちで待つてゐてくれてもいい、といふやうなことを言つて、

「明日は意外の参會者が二人あることになつたです。其だけは幹事の苦心として聊か諸君を驚すに足る積りです。」と得意らしく言つて電話を切つてしまつた。税関長の参會なども意外の感があるのであるが其他にまだ特に意外とすべき二人の参會者といふのは誰であらうか、一寸想像がつかなかつた。

四十二

お久さんは午後の汽車で遣つて来た。妻との間には其後の起居が互に語り合はされた。叔父夫婦は相變らず壯健であるが義州のやうな寒氣の強いところへ行くのは堪へられぬことであるので妹のうちに當分同居することになつたとお久さんは話した。「主人も一寸お目にかゝり度くもあるし、平壤へ降りやうかとも申してゐましたが何分急な事であつたものですから其間が無しに参りました。」とお久さんは又挨拶した。南山樓では始終床の間に出して置いた例の壺も此方へ来てからはもう押入れにしまつた儘にしてゐたので暫く忘れてゐたがお久さんを見るとひしひしと思ひ出された。妻とは傘はれぬ骨肉の親しみを示し合ひつゝあつたが半分眉にかくれてゐる大きな黒子が余には矢張りいゝ心持がしなかつた。

「其つてばねえお久さん明日大同江に舟遊びがあるのてねえもう貴女も一緒に行くことになつてるのよ。」

「まあさうですか。私舟遊びなんかいふもの一度もしたことが無いわ。」

「御草臥れの處御迷惑かとも思ひましたがね。何でも明日は大分大仕掛の遊びらしいですから……」

「いへ結構ですわ。これから義州へでも行つたらもう愈々くすぶらなけりやならぬのですもの。いゝお伴をさせて戴きますわ。」

とお久さんは心から嬉しさうに言つた。妻よりも若い筈である其顔がいかにも世路に草臥たらしく古びて見えた。

「義州でどんな所なんですか。」
「一寸いゝ處ださうですけれど何にせよ寒さがねえ。」

「さうねえ其ては逆でも叔父さんや叔母さんはねえ。」

「さうよ妹の處に残して置くのも私氣がゝりなんだけれど仕方が無いの。」とお久さんはいかにも氣がゝりらしく見えた。大邸に逗留中胤達ひの姉妹等が皆心を一つにして叔母はもとより叔父をも可愛ゆがつてゐるのを美しく見たとや内地から釜山へ釜山から大邸へと餘儀なくせられて来た彼家一家は更に又北へへと推し寄せらるべき運命の下に在ると思つたことやが今更のやうに思ひ出された。さうして其がもう事實となつて現はれて來てゐることを面白くも思つた。

「其てお久さんいつ貴女出發の？」

「明後日は是非出發うと思つてるの。」

「明後日？。其ちや貴女明日一日は丸つぶれになるし何處も見

物する間も無いぢやありませんか。」

「私何處も見物なんか仕度くないわ。も一度貴女方に逢つて置き度い許りに寄つたんだもの。」

「でも其ては餘り急がしいわ。」と妻は残惜しさうに言つてゐた。「まあ緩りなすつたらいいでせう。」

「有難うございますが、もう其手順になつてゐますから。」

「さうですか、其だと石橋やお筆やなんかと御一緒になる譯だね。」と余は妻に向つて言つた。

「さうですわねえ。お話相手があつてようございますわねえ。」
「どんな方？」

「いづれ明日皆お逢ひだわ。其から鶴見も一緒らしいぢやありませんか。」

「さうだ。」と答へつゝ余は我等の知つたものが一時に北移して行く時の勢といふやうなものを思つた。

四十三

翌朝九時前になつて愈々税關官舎の横手に出向いて見ると、支局長は烏打帽を被つてステッキを握つて悠然江上の方を見渡し乍ら突立つてゐた。余等が近づいた時彼は又例のタンシン……チヨッソ……などいふ少數の韓語で一人の船頭と話してゐた。

「大内君いろくお世話ですわね。」と後ろから聲を掛けると、早かつたですわね。」と振向いて「もう官舎に這入つてゐる人も大分あります。貴方がたも少しお休みになりませんか。」と先に立

つて案内せうとした。

「昨日電話で一寸申上げて置きましたが妻の従妹も一人同伴しました。」と言つてお久さんを紹介し「まだ船橋里の方も知らないですから少し時間に餘裕があれば一寸連れてつて来やうかと思ひますか……」

「ようございませすとも行つてゐらつしやい。若し貴方がたの方が遅かつたら此方から船を船橋里の方へつけます。渡船をさういひませうか。」と言つて支局長は何とか言つて船頭に命じてくれた。我等三人は河原に下りた。

よく見ると多くの韓船の中に遊船らしく日蔽を張りたる二艘の船があつた。二艘共に日本風の船で一艘の方は大きかつた。

「此の船ですか。」と河原から聲を掛けると、

「さうです。」と支局長は岸の上に立つて點頭いた。

「これなら幾人でも大丈夫です。」と言ひ乍ら余はふと思ひ出して「昨日お話しの内容外な二人といふのは誰ですか。」

「其うち實物でも目に掛けます。」と支局長は得意らしく笑つた。

「旦那今日は。」と大きな船の上で頭を下げたものがあつた。見るといつもの岩吉であつた。

我等が韓船に乗り移つて四五間漕ぎ出した頃岸の方を見ると洪さんが突立つてゐた。一寸頭をさげると洪さんも會釋をした。船が進むに従つて右岸の景色がだん／＼目に入るやうになつて来るので、あれが大同門鍊光亭と一々お久さんに教へて遣つた。

「まあいゝ景色ですことねえ。」平壤より大邸の方がいゝやうに聞いてゐたけれども、こんな景色は貴方大邸にはありませんわ。」

「此上に例の有名人牡丹臺があるんですがね。今日の船遊びは川下へ下るんださうだから残念ですが、其牡丹臺へ御案内するところが出来ません。」

「其處もいゝ景色なんですか。」

「其はいゝ景色なのよ。」と妻は口を出して、其處に茶店を出してゐる日本人に、お牧さんと言ふ其はいゝ女があるのよ。」

「まあ斯んな邊鄙にねえ。」とお久さんは尙ほ平壤を輕蔑してゐるやうな口吻であつた。

「顔がいゝ許りぢや無い確りした人よ。」と其から暫く二人の間にお牧が話題になつてゐた。余は其話を聞乍ら見て居ると、二臺の車の向ふより驅けて來て、岸の上止まるのが見えた。初めの車から降り立つたのは一人の日本婦人であとの車から降り立つ

たのは朝鮮婦人であつた。もうだんだんと距つて來たので何人であるかはつきり判らなかつた。日本婦人の方もどうも姿形がお筆とも違ふし、其らしい人を想像して見ても思當るものが無かつた。

一 通り船橋里を案内して再び韓船に乗つた時向ふ岸を見ると、岸の上には多勢の人が立つてゐるやうに見えた。けれども日人韓人男女の區別もはつきりはつかぬ位であつた。

「間に合ふでせうか。」と妻は心配さうに言つた。

「若し此方が遅かつたら向ふから迎へに來て止らうといふ事であつたから大丈夫だよ。」

「其だと船から船へ乗るのですか。」

「さうさ。」

「怖いわねえ。」と當惑さうに言った。

早く逃れ。」と日本語で言つて見たが韓人には通じ無かつた。

急いで漕ぐ真似をして見せたら直ちに領承して滅茶苦茶に漕ぎ

始めた。韓人車夫の無暗矢鱈に走るのが思ひ出された。

岸の上の人は暫くぞろ／＼と淀めてゐるらしかつたが即て

河原に下りるのが見えた。彼等は皆船に乗り込むものと見えた。

あとに残つて尙ほ岸の上に立つてゐた一人の人が兩手を舉げて

我等の船を招く形をした。其は支局長に相違無かつた。こちら

も手を舉げて承知の會圖をした。

船は三人をゆさぶるやうに動かし乍ら矢よりも早く飛んで忽ち

ちもう中流を過ぎ向ふ岸の光景もよく見え始めた。大方皆船に

乗り移つてしまつてゐたが、まだ纜は繋いであつた。大きな船の方の舳に立つて又我等を小手招ぎしたのは支局長であつた。さうして此時支局長の傍らに立上つた一人の日本婦人と一人の韓人の女とが又各々ハンケチを振り乍ら我等の方を見て笑つた。これはさつき車から下りた二人の女に相違無かつた。

「お京さんちやありませんか。」と妻は叫ぶやうに言った。

「成程さういへばお京らしいね。其にあの朝鮮人の女は？」

「一寸判らないわ。何だか妓生らしいわねえ。」

「素淡だ。」と余は覺えず叫んだ。

「あい！。さうですわ。あの妓生ですわ。」と妻も應じた。さうして我等は又更にハンケチを振り動かした。支局長の意外な二人と言つたのが即ちこれだと余は直ちに合點した。斯くするう

ちにも船頭は黒い肉塊を蹴らせて漕いだ。

近づいて見ると船の中にはいろ／＼の人が集まつてゐた。よくも斯んなに驅り集めたものだと思はるゝ位集まつてゐた。

「やあ。」やあ。」と諸處から聲を掛けられた。其うち船頭は巧みに舷に舷を寄せて乗り移るやにした。

「厭だわねえ。」と妻とお久さんとは嘖き合つてゐた。お京と素淡とは二女の手を取つてくれた。

「僕等の爲めにお待たせしたのでは無かつたですかしら。」と余は支局長に挨拶し乍ら座中の諸君を見渡した。府尹もゐた。剛三もゐた。あの人が税關長だらうと思はるゝ人もゐた。洪さんもゐた。

「此方へ来たまへ。」と剛三は壓いた。府尹は余に税關長を紹介してくれた。

「どうです。此兩人は意外では無かつたですか。」と支局長はお京と素淡とを顧みた。

「此間も洪さんと出會つた時京城で落合つた仲間が大概皆此方に來てゐるが唯素淡とお京とがゐないのが淋しい様だと話したのさ。其を大内君が傍でゐて聞いて、其ちや其二人を呼ばうぢやないかと提議し直ちに可決したやうな譯さ。君にも相談せうかと思つたが當日になつて驚かすのもいゝだらうといふので黙てゐたのだ。」と剛三は説明してくれた。

船中には尙ほ様々の人がゐた。お牧がゐた。松田もゐた。慶之助もゐた。沼田氏もゐた。

「よくゐらつしやいましたね。」と余は沼田氏の顔を見た時挨拶した。

「府尹が出掛けに寄られて是非とお勧め下さつたので俄に邪魔に上る事になりました。」と沼田氏は其小まめな體を二三度掃がすやうにして答へた。

「其は結構でした。お伴れの方は？」

「あの男は本日他に用事がありました。」と斯んな話をし乍ら尙座中を見渡した。色の黒い三十餘りの藝者が一人と十二三のお酌とがゐた。三味線や鼓が持込まれてゐた。お筆が見えなかつた。

「お筆さんはどうしました。」と余は支局長に聞いた。

「今電話を掛けさせに遣りました。」と大内君は言つた。

「もうお筆だけなら關はずに出してしまつたらいいだらう。」と剛三は言つた。

「其りやいかん。今日はお筆さんが来るといふのをだしにして税關長や沼田君を引張つて来たのだ。いつ迄も待たなくちやいかん。」と府尹は剛三を抑へるやうに言つて笑つた。

「さうですとも、お筆さんが来てくれ無けりや今日の計畫はすつかり崩れてしまふです。」と支局長は心配さうに言つた。其時岸の上に現はれた一臺の車はお筆を載せてゐた。

「お筆さんだ。」といふ聲が二三ヶ所に起つて、座中が色めき立つた。

車を下り立つたお筆は船の中に在るものが騒ぐ程騒ぎもせず悠々と河原に降りて容易に船に乘らうとはしなかつた。

「さあ早く。貴女が来るのを皆待兼ねてゐたのだ。」と支局長は聲を掛けた。

「だつて怖くつて乗れやしないわ。」と眉を寄せて見せた。

「さあ此手をお取りなさい。」とお牧は船の外に手を突出した。

遂に支局長と二人に手を取られたり腰を推されたりして左程にも無いところを大難關のやうにして漸く乗つた。其顔はいかにもあどけない子供々々した風に見えた。

「お筆が乗るとすぐ纜は解かれた。さつきから船にあつて立働いてゐた人は例の岩吉の外に二人の韓人の船頭と一人韓人とも日本人とも一寸見分けのつかぬ洋服を着た男とであつた。昨夜

松屋の女將にお花さんを伴れて行く事を交渉した時女將は、

「女中だけはどうか御免遊ばして。其代り宅の料理番をお給仕旁一人差出しますから。」と言つた其料理番に相違無いと思はれたが若し其なれば兼て話のあつた朝鮮人に相違なかつた。果して朝鮮人とすれば其は岩吉以上に日本語の巧みなハイカラであつた。そうして極めて謹み深くつて何事をするにも忠實で慇懃らしいのが誰の目にも認められた。其男は其邊に亂雑に取り散らされてゐた一枚の座布団を見出して剛三の傍にお筆の座席を作らうとした。

「私この邊がお話し相手があつていゝわ。ねえ貴女がた。」と言つても牧と妻との間に坐り乍ら座中を見渡して一禮した。其顔には初心らしい羞耻の色を見せた。

「今迄何をしてゐたのだ。」と剛三は叱るやうに言つた。

お筆は剛三の眼を怖れるやうに一寸顔を背けて、

大變お待なすつて？」と妻を見た。

「いへ私達も今來た許りなんですよ。」と妻は正直になだめるやうに言つた。

舟は岩吉が日本風の櫓を漕いで、他の二人の船頭は竹棹で推してゐた。我等の船と一緒に運動を始めたのは妓生を載せた小さい舟で、其處には妓生が五人に樂人が五人乗つてゐた。妓生は一處にかたまつて皆不思議さうに我等の舟の方を見てゐた。特に素淡の一人交つてゐることが彼等に取つては何よりも怪しき事のやうに見えた。樂人は京城で見たのと同じく大方年をとつてゐたが、其等も皆鳴りを鎮めて長い煙管を啣へてゐた。

我等の舟中では思ひ／＼に話が始まつてゐた。お京とお筆とは斯んな話をしてゐた。

「姉さん草臥れは出なくつて。昨夕あれから待つていよ。」

「さうでしたらうねえでもね素淡さんが淋しがつて離さなかつたんですもの。今夜は貴方の方に泊めて貰うわ。」

「お京さんはいつ來たの？」と余は傍から聞いた。

「昨日です。」

本當によく來たね。其にしてもよく出られたねえ。

「え、丁度お客切れてしてね、其に素淡さんも私が行くんなら行つて見度いつて言ふんでせう。女將さんが何とか言つてゐたけれど來てしまつたわ。」

「相變らず亂暴だな。」

「だつて貴方がたが呼んだんぢやありませんか。其ても素淡さんが来て嬉しいでせう。」と素淡の手を取つて二三度動かした。素淡は笑顔を作つて見せた。

松田と沼田氏との間にも何か話が始まつてゐるし、洪さんは向ふの舟の老樂人と水を隔てゝ話してゐた。

洪さんは樂人たちの言つたことを取ついだ。

「もうそろ／＼始めても宜しうございせうか。」

「いゝとも。」と剛三は答へた。洪さんが又其を通辯すると同時にドーンと太鼓の音がして——其太鼓は船の艦に釣り下げであつた。——其から長鼓、伽倻琴、洞簫、鐵琴等が各々思ひ／＼の音を出して其處に偕調のある音楽が奏し始められた。我等の心も流

石に浮き立つた。舟遊びだといふやうな心持が凡ての人の顔の上に現はれた。

「どうです、妓生船もあの調子では困るすな。」と府尹は言つた。よく見ると妓生等はバイレートを吹かして器樂の節奏に就いては知らん顔をしてゐた。長鼓を打つてゐる老人がつゝしまやかに口のうちに唄を歌つてゐた。器樂の音が獨り水の上を這うて人の心をそゝる許りで、目のあたりに見た舟中の光景は府尹の言つた通り殺風景なものであつた。

「もうそろ／＼と此方も始めやうぢやありませんか。」と言つて支局長は酒の畑を命じた。船が漕ぎ出されてから朝鮮人の料理人は洋服姿の膝を立てたり折つたり頻りに艦の方で立働さ、三十餘りの色の黒い藝者と鼻の低い田舎びたお酌とは其を手傳つて

ゐた。

「はい。」と料理番は支局長の方を向いて兩膝を突いて其上に手を載せつゝ、命令を待つやうな顔をした。支局長は重ねて酒の煙の事を命じ、御馳走をも開く事を命じた。

「かしこまりました。」と料理番は即ちに命を聞いて前より一層敏捷に立働いた。もういつの間にか七厘に火が起こつて藥鑪の湯がたぎつてゐた。其中に樽から出された酒が徳利に移されて潰けられた。船は中流に出て下流へくと漕がれた。妓生船はより／＼に近よつたり稍々離れたりしつゝ、相變らず單調な靜かな樂を奏してゐた。

四十五

「二つの藥鑪の湯では二本づゝの烟徳利の烟でも忽ちに缺乏を告げて料理番は獨りで狼狽へた。色の黒い藝者も鼻の低いお酌もまご／＼してゐる許りで役に立たなかつた。先づ見兼ねて立つたのがお牧で、お京もつゞいて手傳つた。重詰めの御馳走は人數に比べては餘りに上品で、一重の鮓は剛三府尹、松田等の前で忽ち平げられた。

「ちと御婦人方の方にも廻して戴かないと。」と支局長は幹事丈に氣を配つた。

「もうこれより無いのかね。」

「まだ一重はある筈です。ねえ君。」と料理番を顧みた。

「はい。」と料理番は世話しい中で尙ほ膝を折つてございますが

出させうか。

「出してくれ。もう一重はあの邊で無くなつてしまつた。」

「は、これは申譯が無かつたな。僕はまだ澤山仕入れてあるのかと思つた。」

「今からこれぢや心細いね。」

「まだ色んなものがあるさ。食ふものが無くなつたところで酒さへあればいゝだらう。」と支局長は艦に据ゑてある一斗樽を顧みた。其傍にはビールの繩縛りも林立してゐた。

「男の方はどうでもいゝけれど、婦人方にひもじい目をさせては申譯が無い。其邊の御馳走はなるべく此方に廻してくれ玉へ。」と支局長は頻に氣をもんでゐた。さういふうちにも剛三の長い手は重の中に落ちた。

「其處で彼方の先生達にもどうかせなければなるまい。」と府尹は妓生船の方を顧みた。小さい船は此時我等の船を稍々離れて淋しさうに向ふの方を流れ器樂の節奏もいつの間にか止んでゐた。

「さうだ。忘れてゐた。」と支局長は手を打つて、「おい君、妓生達に食はすものは別に出来てゐる筈だね。」

「はい。」と料理番は又謹直にかしこまつて出来て居ります。出させうか。」と命を持つ。

「出して遣つてくれ。……こら其方の船を此方に漕ぎ寄せろ。」と支局長は立上つて命令すると妓生船は漸次此方に漕ぎ寄つて来た。

「忘れてゐたが、素淡に勸酒歌を唄つて貰ひ度いですね、洪さん一

つあなたから勸めて下さらんか。」

「一人ではどうでございますか。」と言ひ乍ら洪さんは素淡に勸めた。素淡は低い聲で唄ひ乍ら余等に酌をした。

「素淡の勸酒歌が終らぬうちに妓生船は舷を磨る位に近より終りの一二節は五人の妓生も同吟した。さういふうちにも御馳走は舟から舟に運ばれ、ビールの瓶の一縛りは樂人の手に渡された。船は又少し宛離れたが見ると妓生船の中も今迄とは違つて色めき立つてゐた。妓生等が争つて夏蜜柑を食つてゐるのが明らかに見えた。

其うちに我等の船の中も大分銚子の數が重なつて、府尹の力強い笑ひ聲や、剛三のぞんざいな言葉の外に松田や税關長や支局長

やの聲高い話し聲が混雜して聞こえた。

お筆は妻とお牧の間に坐つた儘つゝましやかに控へてゐた。

けれども顔はもう櫻色に染まつて眼は時々怪しき光を放つやうに見え、お牧の落附いた搖がぬやうな態度とは著しい對照を爲してゐた。

「お牧さん、貴女も少し飲んだらいゝだらう。」と余は歪をさして、今日はよく出られましたね。」と改めて挨拶をした。

「珍らしいお催しだものですから。……萬景岱といふのも名許り聞いてゐまして、まだ一度も參つた事がございませぬものですから旁々。」

「萬景岱は知らない人が多いやうですね。松田君君は？」
「僕も初めてだ。」

「税關長は？」

「僕はよく知つてゐます。萬景岱の一部分は税關の所有地面になつてゐますから。」

こんな話をしてゐるうちに船はだんだんと漕ぎ下されて鐵橋の下を過ぎた。川幅は益々廣くなつて兩岸の堤にはところ／＼に楊柳が柔かい丸い綿をつぐねたやうに立つてゐる許りて他に何も眼を遮るものゝ無い廣漠たる眺であつた。

「いゝ景色だ。これは又他で見られぬ景色だね。」

「大陸のやうな感じだねなど、話し合つた。川水は風を受けて少し濁浪を上げてゐたが追手であるので船は早く進んだ。」

「汐は？」

「今は丁度満ちきつたところていゝ鹽梅ですが歸りが少々難澁

ですぞ。」と税關長は言つた。

「丁度いゝだらう上潮になつて。」と府尹は言つた。

「駄目だよ。此位の船になると此邊の瀬を上るのには餘程満ちなくてはいかんからな。十二時過ぎなくつちや駄目かも知れん。」

「其は大變だ。」と皆聲を揃へて言つた。

「其んな筈は無い。」と支局長は反對したが、此は本職である税關長の言葉を打消す力は無かつた。

「仕方が無い歸れる時に歸るのさ。」といふ剛三の一言に決極皆賛成せざるを得なかつた。

「お筆さん一つお躍りよ。」とお京は促すやうに言つた。

今迄有るか無きか判らなかつた藝者と舞子とが漸く人の眼に

とまるやうになつて、三味線は袋から調緒の色の銷めたよれく
になつた大鼓小鼓は風呂敷の中から取り出された。

「いよ／＼お筆さんの踊が拜見出来さうてございますね。」と洪
さんは悲惨な口許に微笑を湛へた。

「さうだ。其を待設て己等は來たのだ。」
と松田は乗出した。

「本當にねえ、いつからかお約束だつたのねえ。」と妻も調子を揃
へた。

「まあ大變ですわねえ。」とお筆は恥かしげにもじくして見
せた。大同江の廣々とした江心の舟の中で彼女の踊を見ること
は余に於ても楽しい待設けてあつた。

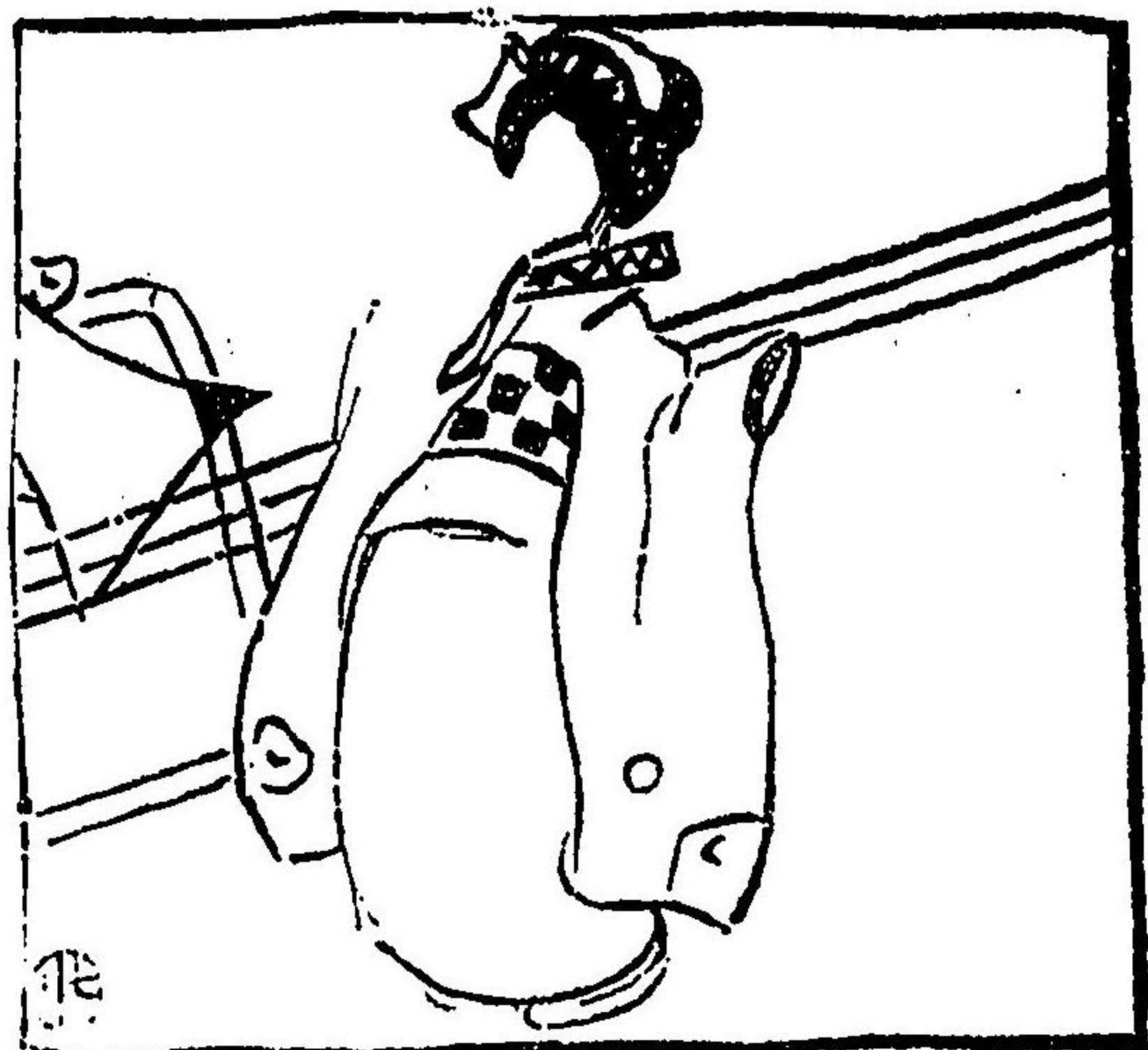
三味の音がした。色の黒い藝者の膝の上には古びた三味線が

載つてゐた。ポツン／＼と同じやうな音色が二三度引つゞいて

した時お筆の顔にもお京の顔にも
妻の顔にも抑へ切ぬ冷笑の影が漂
ふた。

「貴様其で弾けるのか。」と府尹の
かけかまひの無い一言に背い、機
會を得て吹き出してしまつた。

「弾けてよ貴方。」と藝者は顔を眞
つ赤にし乍らも其でもジャランジ
ヤランと弾き立てた。其音は賤し
く騒々しかつたが余は此女を可愛



想だと思つた。

「ぢやあ私唄ふわ。」と言ってお筆は其賤しい三味に合はせて賤しい唄を歌つた。

二九四

「およしなさいよ。そんな唄。」とお京は叱るやうに言つた。けれども其を弾いた藝者は「コリヤ〜」と言つて得意氣にあとの唄を待つてゐた。

お筆はお京の方を向いて藝者に見えぬやうに一寸舌を出した。其は人の心に反感を起さす處もあつたが美しくしい顔の打解けた表情が寧ろ快く人々の眼に映つた。藝者の尙ほ「コリヤ〜」と言ひ乍ら續けさまに弾き立てる音は騒々しかつた。

「斯んな三味で踊れるものか。」といふお筆の高慢くさい表情を悪むものは無かつた。お牧やお久さんの顔にも侮蔑の色が漲つてゐた。

誰も續けて唄ふものが無いので藝者は

「小松様何か踊り。」とお酌に命令した。お酌は黄色い聲をして、姉さん何にしまひよ。」と古びた舞扇を持つて其前にかしこまつた。

「可愛い、兒だわねえ。」とお京はせうこと無しに言つた。

此お酌の踊の爲めに、お筆の踊の問題は立消えになつた。さうして皆苦々しさうに酒を飲んだ。

「でも子柄に似合はん踊のたちはいゝやうだ。ねえお京さん。」とお余は言つた。

「本當ですわ。これてよく教へたら上手になるてせう。」とお京は言つた。舟板を踏む力強い小さい足音は哀れに余の耳に響いた。

三九四

「此子だらう近頃大分から来たとかいふのは。」と府尹は支局長を顧みた。

「さうです。」と支局長は答へた。

初めから黙々として酒許り飲んでゐた沼田氏は膝を抱いて熱心に其踊を見てゐた。其瘠せた小ぢんまりとした體は其自身が鐵槌のやうに小堅く見えた。

酔は川風に吹き拂はれて飲む片道から醒めて行くやうな心持であつた。

「もう騒々しい三味は止さんか。」と府尹はつくづく飽きくしたやうに言つて、

「お筆さん、僕は貴女の踊を見る爲めに來たのだ。是非一つ見せ

て下さい。三味線に困つたなあ。」と藝者を目の前に置き乍ら當惑したやうに言つた。「お牧さん、貴女、弾けないか。」

「駄目ですよ貴方。」とお牧ははつきりした聲で打消した。

「困つたなあ。」と府尹は余の妻からお久さん、お京といづれもの顔をづらりと見渡して、どれにも望が無いとあきらめたかの如く絶望したやうに言つた。

「お京さん、弾けよ。」と余は此前の事を知つてゐるのでお京に勧めて見た。

「厭ですよ。」とお京は余に目くばせして其爲めに來てゐる商買人を閑却することを尤めるやうに言つたが、お筆は其にかまはず立上つたので遂にせうことなしに三味線を膝にのせた。洪さんや税關長や松田は拍手をした。

お京の三味は相變らず覺束無つたが其れでも藝者の程賤しくは聞こえなかつた。處々合の手の間違つた時にはお筆は微笑した。其れでも眞面目に踊つた。船の中のもの皆鳴りをしづめて見た。岩吉も櫓の手を緩めて日蔽の柱の蔭から覗くやうにして見た。

ふと氣がついて見ると川幅は愈々廣くなつてゐた。妓生の船は我等の船を二間許り難れたところを漕いでゐたが、樂人の中にはピールのコップを持つて口を開けて此方を見てゐるものがあった。妓生は互に凭れあつて口の中で何かを唄ひ乍ら組み合せた手を一緒に膝の上で動かせてゐた。樂人の二三人の視線が我船との連絡を保つてゐる許りて、二艘の船は全く所々の世界を載せて流れてゐるやうであつた。我船にはお京のふるへるやうな

聲にお筆の力強い足拍子が交つて岩吉の櫓に置いた手は始ど止まつてゐるやうに見えた。

お京が覺束無く弾き終つてお筆がしなやかに船板の上にお辭儀をした時には「ワッ」と一座が賑かになつた。上部はどこ迄も未通女らしく装つてこれ見よと言はぬ許りに一座を征服しやうとつとめた痕跡はお筆の顔に隠すことが出来無かつた。皆の眼は彼女の上に注がれて口々に喝采の言葉が述べられ澤山の盃は一時に其前に集まつた。一方で無かつたお京の苦心は誰も察するものが無いらしいのを氣の毒に思つて余はお京に盃をさした。

「大變な骨折りであつたね。」
「全く骨が折れたわ。」とお京は軽く笑つて「お筆さん踊悪かつた

てせう。」と何處迄も姉らしい態度を失は無かつた。

殆ど存在を認められない許りか、全く侮辱の的になつたも同じな藝者は頻りに酒を飲んでゐた。

「姉さん有難う。」とお京の返した三味を受取り乍ら、
「弾悪かつたでせう。」と言つた彼女の聲は妙に乾いて上づつて
ゐた。

一座は湧き立つやうに賑かであつた。謹嚴な沼田氏迄が松田
を相手に相好を崩して話してゐた。税關長は舷に背を凭せて詩
を微吟してゐた。此時樂聲が俄に起つたのは妓生船からて妓生
は聲を揃へて歌つてゐた。

其うら又藝者がのさばり出て三味線を弾いた。黙つて引込ん

てゐればいゝのと思はれるのに彼女は兎角のさばり出たが
た。其實自分の藝の拙いことは承知してゐるらしいのであるが、
尙ほ引込んでゐることが出来無いやうであつた。人々に嘲られ
乍らも三味でもいぢくつてゐる方が黙つて引込んで手持不沙汰
にしてゐるよりはまだ自分で自分を紛らすことが出来るのかも
知れなかつた。

お筆は又其三味につれて下卑た唄を歌つた。松田も其に和し
て歌ひ、支局長も大きな聲をして歌つた。一時賑かであつて妓生
船はいつの間にか又ひとつそりとなつた。

「どうも日本人と妓生とはまだ距離があるね。」と稍々酔つた府
尹はなれくしくぞんざいな言葉を使つた。

「さうだねえ、妓生船も前途遠かな。」

「ハ、ハ、ハ」と二人で笑つた。

「萬景岱が見え出した。」と岩吉は相變らず櫓を漕ぎ乍ら大きな聲をした。一挺の櫓に今は他の二人の船頭も手を添へて力を合せて漕いでゐた。

「見え出した。」といふ聲が、一齊に船の中に起つた。

「それが萬景岱です。」

「あの向ふに見える高い丘です。」

「あの少し川の中に突出たやうになつてゐるところですか。」

「さうです。」

余は豫期してゐた程の處とも思はれなかつた。牡丹臺の話が出るとすぐ引合ひに出る名前である爲めに矢張り雄大な景色の處であらうと思つてゐたのに、これは唯の丘に過ぎないやうに思

はれた。

漸く皆空腹を訴へてゐた。我等の方は晩飯の用意にと尙ほ二三重をしまつて置いたのであるが、妓生や樂人の食料はもう夙くに盡きてしまつたらしかつた。其で萬景岱に船を着けて後ち其處の百姓家で飯だけ焚かさうといふ事に評議が一決した。妓生の船は相變らず我等の船を離れて漕がれつゝ、時々長鼓や太鼓の思ひ出したやうに鳴らされる音が淋しく聞えた。

お筆は今は三味線を膝に載せて自分で弾いてゐた。妻もお久さんも感心して聞き乍ら時々浮かれたやうに笑つてゐた。席上を見渡して見ると素淡と洪さんの外は皆何事も忘れて笑ひ興じてゐるやうに見えた。固より明日は遠く北の方に去るものだといふ事を考へてゐるやうな顔は一人も無かつた。慶之助も遂

に詩吟を遣つた。税關長は半ば頃から其に同吟した。余は酒を飲めば飲む程醒めて来るやうな心持がして此の酔ひ興じて居る一座を唯ぼんやりと眺めてゐた。洪さんは時々鋭い一瞥を余の方に與へつゝ口許には常に微笑を湛へてゐた。

「明日は此一座もちりくゝになるのですね。」と余は洪さんに言つた。

「さうでございます。私もことによれば明日歸らうかと思つてゐます。」

「京城へですか。」

「さうでございます。」

「もう訴訟の方はお濟になりましたか。」

「いえまだでございますけれども、まだ公判迄には大分時日があ

りさうでございますから。」

其中岩吉は船を廻して舳を岸の方に向けた。さつき遠望されてゐた一帯の丘はもういつの間にか目の前に聳えてゐた。

四十六

見ると岸には二三本の古い楊柳があつて其楊柳の間に唯一軒の百姓家があつた。例の菌のやうな草屋根て其が後ろには丘を負ひ前には楊柳を控へてゐるのが静まり返つた太古の趣である。船の舳が突き進んでゐる水の中には柔かい藻草が生ひ茂つてゐて岩吉の櫓が引上げられると他の二人の船頭は竹棹を以て鉛のやうな重たい水の中を推した。水から引抜かれた竹棹の尖には

黒い雫がちぎれるやうに落ちて如何に此水底の泥が深いかを思はしめた。

遂にすべるやうに舢は岸に着いた。岸といふよりも寧ろ泥の中に突込まれた。岸にも一體に藻に似たやうな草が生ひ茂つてゐたが此舢の突込まれたあたりは陸地の方からじめじめした水が流れ込んでゐて溝ともつかず沼ともつかぬやうなものになつてゐた。さうして其中に飛石のやうなものが亂雑に置かれて自ら其處が往來のやうにもなつてゐた。

「此處から上るのかねえ。」と松田は驚いたやうに言つた。

他に道が無いんだもの。」と府尹は答へた。岩吉は舢から眞先に岸に飛下りた。黒い泥がバツと四方に飛んで岩吉の腿のあたりにもはねた。何とか岩吉は初じめて朝鮮語を使つて其泥に閉

口したらしい料をして見せた。さうして足は頻りに泥の上をすべり乍ら他の二人の船頭が竹棒を推すのと同時に其舢の綱を引張つて重い船を岸へくと引上げた。彼の亂雑に置かれた飛石の漸く泥の上に頭を出してゐるのがある邊に輕うじて船は引上げられた。

「さあお下り下さい。」と岩吉は言つた。一番に飛下りたのは税關長で彼は馴れてゐる爲めであらう巧みに其飛石の上を跳ねるやうに飛び乍ら上つて行つた。續いて松田府尹慶之助洪さん余といふ順序に上つて行つたが松田も余も踏みそこなつて靴や足袋にしたゝか泥をつけた。「迎てもこれは女連衆はあがれまい。」と松田は言つた。振り返つて見ると剛三沼田氏も危うげに飛石の上を踏みつゝあるのを女達は船の上に立つた儘情なさうに見て

ゐた。支局長と料理番と岩吉とは何かいろ／＼と談合をしてゐるやうであつたが、真先に降りやうと決心したらしいのはお牧で、彼女は余等よりも巧みに飛石の上に降りて下駄の先も汚さずに上つて來た。之に勢を得てお京も飛び下りたが若し岩吉が泥の中に立つて彼女の手を取らなかつたら危うく顛倒するところであつた。妻もお久さんも支局長料理番岩吉の三人係りて漸くたしいた失敗無しに其あとに續いたが、お筆素淡藝者お酌は取り残されて、衆人環視の中に皆極り悪さうに突立つてゐた。お筆は岩吉が負らうと言つたのを排斥して矢張り妻やお久さんと同じやうに船からは支局長料理番に手や帯の邊を抑へてもらひ下からは岩吉に支へて貰つて、如何にも大事件の如く取り做しつゝ、漸く飛石の上に運び下ろされた。斯く人々の助力を借り乍ら尙ほ兩

方の足袋を泥だらけにしてしまつて斯る場合にも尙ほ嬌態をすることを忘れぬ彼女は強ひて顔を赤く染めて堪へられないやうな風をして見せた。拍手が松田や府尹あたりから起つた。續いて素淡はキャツ／＼と笑ひ乍ら岩吉に負さつて無事に我等の傍に運ばれた。あとに残された藝者とお酌とも同じやうにして運び上げられた。

却つて此の一騒ぎに興を催ほして我等の一行はぞろ／＼と百姓家の横を通つて丘の上の上つて行つた。船の中に在る時は左程に思はなかつたが焦げるやうな日中の暑さは帽子一つでは凌ぎにくい程であつた。税關長を先にして細い道を一列に上つて行つた。

高みから見下ろすと我船は楊柳の岸に繋がれてあつた。さう

して妓生船も其に並んで繋かれ、妓生達も樂人も皆船に残つてゐた。今楊柳の下を通つて百姓家の方に赴きつゝあるのは岩吉と料理番とであつた。彼等二人は妓生等の爲めに飯を焚く事を百姓家に交渉する筈になつてゐたのであつた。

妓生等に對する一切の事は料理番と岩吉とに一任して我等の一行は木の無い丘の上を尙ほだん／＼と登つて行つた。

暑い。／＼と口々につぶやいた。女軍は皆蝙蝠傘をさしてゐる中にお筆のは殊に美しく赤い色が打ち榮て他の多くの蝙蝠傘は獨りお筆のを守護してゐるかの様に人々の眼には映るのであつた。

其時ふと氣が付いた様に剛三は言つた。

「素淡がゐないぢやないか。」

「ホンにさうだ。どうしたか。」と皆立どまつた。

「初めから少し遅れて來てゐたぜ。ねえ貴方がたとは一緒に無かつたですね。」と支局長は聞いた。

「え、あの上り口であとに残つてゐらつしやいましたよ。手招きしましたけれども頭を振て笑つてゐらしたから其儘にして置きました。」と今妻と景色を指點しつゝ話し合つてゐたお牧は打晴れたやうな顔をして此方に向いて答へた。

やがて一行は又進んで松林の中に入ると、其處に洪さんほう腰を下ろして我等を待受けてゐたが、

「水縦横と言つたやうな趣でございませう。」といさなり彼方を指して言つた。

「君は何處から上つて來たのです。」

「この裏の方を通つて來ました。」と別の小さい路を指した。其路の下つてゐる方面にも平野が開けて一かたまりの村落が遠望されたが其よりも洪さんの教へた正面の方は我等の足下に光つてゐる大同江の本流の他に尙ほ三條四條の水が帯のやうな少しづゝの平地を夾んで光つてゐた。

「あれは別の川ですか。」

「皆大同江の支流です。此邊は殊に澤山に分流して下流では又た一緒になつてゐます。結りあの間にある土地は皆中洲ですよ。」と税關長は答へた。

「珍しい景色ですね。」と余は覺えず嘆稱した。

「あの楊柳村はどうです。」と支局長は更に右手の方を指した。

其處は彼の山裏の村落の方から流れて來てゐる別の流が大同江に落合て丁度其突角をなしてゐるところで一軒の家も無く唯數十本の楊柳が蔭の如く密生してゐた。其もこれも内地では見られぬ景色であつた。

「萬景岱の名は此の眺望から起つたのですね。」と余は初め此ただの平凡な丘を何故牡丹臺と併稱するかを怪しんでゐた其疑の氷解するのを感じた。際涯の無い平野の果てには熟視するに従つて水の流れが殖えて來るやうな心持がした。お牧と妻とお久さんとはい等の傍に立つて同じく此景を眺めてゐたが、お筆とお酌との蝠傘は松の間を縫うて戯むれるやうに走つてゐた。色の黒い藝者は詰まらなやうな顔をして崩れたやうに松の根方に腰を下してゐたが腰の下に敷かれた手拭の端には横文字の染め

抜かれてゐる悪い藍の色が見えた。

「此邊が一體に税關の所有地になつてゐます。」と税關長は洪さんに教へてゐた。

「どうですお牧さん、此處にも一軒茶店を出しては。」と支局長は言つた。

「お客のある日が一年に何日位ありませう。」とお牧さんは笑つた。

「さうさ、茶店の出来るのも税關の建物でも出来てからの事だね。」と松田も笑つた。

「此間は此處迄千早艦が溯江して來たです。大概な商船も此處迄は上れるさうです。だから此處に税關の出張所位を造る必要は遠

からず起ること考へるです。どうです、お牧さんも土地だけ買つて置いては。此邊は廉いですよ、坪が一錢位のものです。」

「驚いたものですね。此間岩吉が綾羅島を買つて置けと勧めた時、綾羅島の王になるのもいゝと言つて笑つた事ですが、さうするとあの楊柳村だけの領主になつてもいゝですな。」と余は斯く言ひ乍ら楊柳村の領主といふ言葉のうちに物語のやうな情味を覺えるのであつた。

「今あの煙のやうな楊柳を見てゐると楊柳村の領主もいゝが、あれが幽霊のやうに枯れてしまつて、大同江が鐵のやうに結氷する恐ろしい冬が來たら其どころではあるまい。」と府尹は笑つた。

「夏でも五月雨の頃になると其の邊は一面に濁水が溢れて楊柳の先が僅に水の上に出る位になつてしまつてせう。」と税關長は

自分の買った此の高地の領主顔をして其柳楊村を見下ろし乍ら言つた。

「水に漬からうが氷が張らうが其んな事はどうでもいゝのですよ。唯楊柳村の領主だと思つてゐれば其ていゝのだから。」と余は閉口しなかつた。

「文學者らしい事をいふな。」と府尹は又笑つた。ふと冬も溜突無しにあの牡丹臺の板屋に冬籠りするお牧の事を思つて其美しい顔を見た。秋の日の晴れ渡つたやうな明るい顔は今も京と何事かを話し合ひつゝ晴れやかに笑つた。其處へお酌の小松と戯れ乍ら走つて来たお筆は、恰も小松と同じ年輩位の小娘らしい色を漲らせて、其上額に流れる汗を拭ひもせず、お京の帯の處に取りすがり乍ら、

「小松さんがいけません。」と帛を裂くやうな聲をして一同を驚かせた。皆が笑ひ乍らも彼女の上に腫を集めた時、其の顔には押へ切れぬ得意の色が動いた。皆何となく小腹の立つ思ひをし乍らも尙ほ一夜の雨に咲き亂れた櫻のやうなあてやかさを彼女の上に認めぬことが出来なかつた。此時退屈さうに欠びをして帯の間から例の煙草入を取り出したのは松の根方に腰を下ろしてゐる彼の色の黒い藝者であつたが誰も其を顧るものは無かつた。

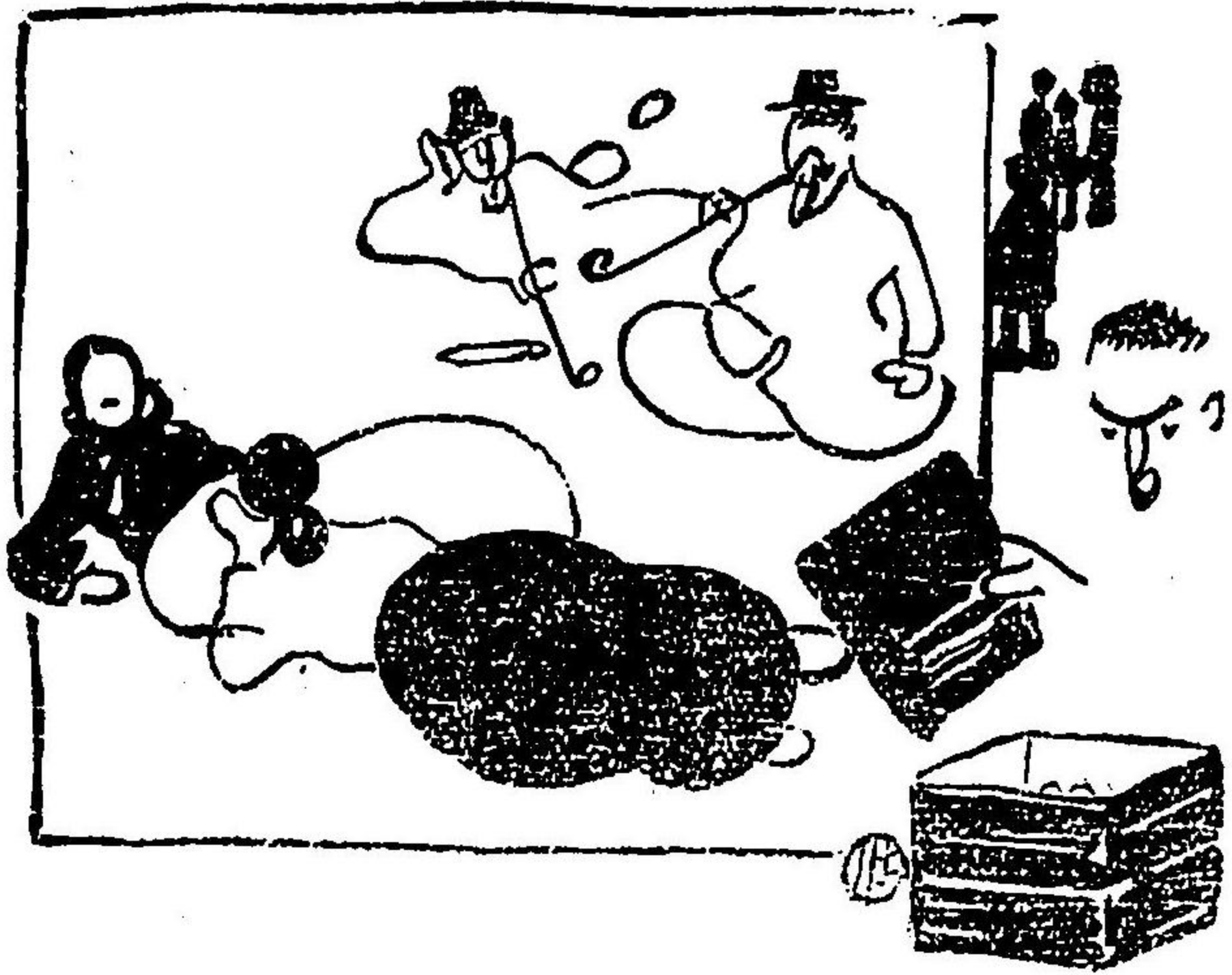
四十七

剛三は洪さん慶之助等と共にさつきから松林の間を抜けて丘傳ひに散歩してゐたが、いつの間にか下の路に出て我等を呼び掛

けた。

「僕等は此方の路から歸るよ。」

其處で取り残された我等もそろ／＼と動搖を始めて下り掛け
た。松林を出ると又焼きつけるやうな暑さになつたが下り坂は
上る時程の苦痛は感ぜずに皆談笑し乍ら降りた。見ると下の路
では素淡もいつの間にか剛三等の中に交つてゐた。さうして楊
柳の岸に繋がれた二艘の船が又目に入るやうになつた。樂人や
妓生等は船に残つてゐるものもあり百姓家の前の乾葉の上に寝
轉んでゐるものもあつた。はじめは白つ茶けた乾葉の中に紫や
赤の派手な色が見えたので妓生だらうかと注視したが顔も手も
見えぬので怪しみつつあるうちに少しづつ動くのを見て漸く其
が妓生の寝轉んでゐるものであることを慥かめて一同で笑つた。



「其は困つたね。」と支局長も頗る當惑した。下の路から落合つ

飯を焚いて貰つて食ひふくれ
てゐるのだらう。」

「我等も大分空腹になつたね。」
など、話し合つて降りた。とこ
ろが我等を出迎へた料理番は當
惑したやうな顔をして斯う言つ
た。

「此の百姓家では飯を焚いてく
れませんでした。幾らお錢を遣
ると申しましても米が無いと言
つて承知して呉れませんでした。」

た洪さんは其理由を説明するやうに斯う言つた。

朝鮮の片田舎の百姓家では五日なり一週間なり家族の食ふだけの米を貯へて居りますので若し其のうちを他に頒つと其を補給する方法が無いのでございます。其で幾ら金を遣りましてもなか／＼分けてはくれません。若し向ふが信用して米を貸してくれることになりまして返すのは矢張り米で無ければ承知しません。此邊の百姓家はそんなことはあるまいと思ひましたか……。

「金が通用しないのは驚くね。」と剛三は笑つた。太古の姿をして居る水のほとりの一軒家は我等の困却に頓着なく唯寂然として静まり返つてゐるのが腹立たしくも見え貴とくも考へられたが亦た薬の中にゴよ／＼と蠢きつゝある紫色や水色等の空腹に

堪へ無いでゐることを考へると可愛想にもあり滑稽にもあつた。けれども我等は船に歸つて後ち其處に一つの大きな事實を發見して其考へは逆轉した。船に歸る時は下る時程では無かつたが其でも相當に混雑して漸く一同を運び終り料理番も岩吉も其々配置に着いた時、

「其處に残つてゐるやつを半分だけでも妓生舟の方に遣つて呉れ。」と支局長は料理番に命じた。料理番は早速命を領して重箱に手を掛けたが驚いたやうに斯う言つた。

「貴方がたが召し上つたのではございませんか。」

見ると料理番の手にしてゐる重箱は悉く空であつた。

「僕等が食ふ譯は無いちやないか。」と支局長は叱るやうに言つたが直ぐ其の意味は誰の心にも讀めた。

「お前等は何處に行つとつたのだ。」

あの百姓家で斷はられたものですから何處か他に百姓家は無からうかと思つて少し其邊を探し歩いてゐたのでした。」

「ひどい奴等だ。」と府尹は妓生舟の方を見た。樂人も妓生も知らぬ風をして相變らず煙草を吹かしてゐた。」

「まあ。」と女連衆も呆れたやうに言つたが暫く皆あつけに取られて後ち遂に噴き出して笑つてしまつた。岩吉等はいつの間にかもう纜を解いたので我等の船と妓生の舟とは稍々距離を保つて流れはじめた。時計を出して見ると三時を過ぎてゐた。

「仕方が無い酒でも飲むさ。」と支局長は憤激するやうに言つた。

「歸りは難義だ。」と岩吉は櫓を推し乍ら言つた。

「十二時頃迄は駄目だらう。」と税關長も言つた。成程氣がついて見ると舷を流れる潮の流れは頗る急らしく岩吉の力瘤を入れて推す櫓も充分の働きを爲さぬやうに見えた。

「まだ引汐だね。」

「大變な勢だね。」と人々は皆舷から外に首を突出して其急な流を見た。残りの二人の船頭は岩吉に力を合はせて一挺の櫓を又三人で漕いだ。

料理番は酒を酌して出したが何も食ふものが無いので皆苦さうな顔をして飲んだ。

「おい又三味線でも弾け。」と剛三は藝者に命令した。藝者は又ジャラン／＼と鳴らし始した。お酌は又船板を踏み鳴らして同じやうな手つきをして無暗に踊つた。

税關長は自分の運命を知り抜いてゐる人のやうに舷に頭を載せて静かに日蔽の柱を見つめてゐた。けれども其他のものは岸の立木がいつ近經つても同じやうな處に在つて船の進んだ容子が少しも見えぬのに氣を腐らし始めた。遂に船を岸近く漕ぎ寄せて三人の船頭は岸に飛び降り一本の大きな綱を肩にして引船をずる事になつた。草の生ひ茂つた中や泥のぬるぬるとすべる汀を三人はよつちらくと船を引いて登る光景は面白く眺められたが此鹽梅ていつ歸られる事かと思ふと情け無くもなつた。

「お筆さん又踊ら無いか。」と府尹は所望した。

「踊るより叩くは。」と言つて藝者から三味線を受取り、美しい聲をして歌ひ乍ら叩いた。其唄の中には「綱は上意紀伊の國わがものといふやうな我等の耳にも聞き馴れた物もあつた。ふり返

つて見ると妓生船も我等の船より遅れて矢張り一人の船頭が綱を引いて上りつゝあつた。時々太鼓の音がして「チョツター」といふ聲も交つて聞えた。

「妓生船」と余は心のうちで繰り返してなつかしく思つた。此の實際の妓生船と余が空想の妓生船との間には餘り多くの距離があつた。水と油といふ言葉があるけれ共彼等と我等日本人との間とは到底融和すべからざる或物があるやうにも見えた。妓生なるものも朝鮮見物に來たものが朝鮮料理にいやく箸を着けながら見物する位が關の山かとも考へられた。今日のやうに長い時間眺めてゐると土で作つた人形程の興味も無かつた。

「此に至ると美しい妓生よりも色は黒くとも鼻は低くとも日本人の藝者やお酌の方が矢張り同じ血が流れてゐるのだ。」とさ

う思つて彼等妓生や藝者などを見渡した時、いづれも同じやうな淋しい顔をしてつくねんとしてゐるのを見て又をかしく思つた。日が傾いて來るに従つてだん／＼涼しくなり僅に薄い上着を着てゐる妓生等は寒さうに寄り合つてゐた。獨り妓生船の空想が破れた許りて無く今日の船遊び其ものが余の平壤策の如何に實際に遠いものであるかといふ事を事實的に證明する爲めに催されたやうな感じがしてすぐつたいやうな心持もした。心がか府尹の顔には冷笑の閃きが見えるやうにも覺えた。其時に當つて又一つの大きな事件が目前に横はつた。其は税關長等には豫期されてゐたことであらうけれども不案内な我等には聊か驚かれた。といふのは今迄引船をしてゐた右岸はもう引船をする足場が無くなつた爲めに川を横ぎつて左岸の方に船

を移さねばならずさうするのには其處にある一つの急な瀬を越さねばならぬといふ事であつた。三人の船頭は綱を手ぐつて舳に投げ込み、聲を合はせて船を推したけれども船の腹かごり／＼と石を磨るのみか瞬く間に三四間も船を推し流さうとするやうな激しい急流の爲めに殆ど進退が谷まつてしまつた。

斯うなると男連衆は黙つて見て居ることが出来無くなつてしまつた。一番に裾をからげて急流の中に飛込んだのは支局長で府尹も沼田氏も松田も慶之助も續いて同じやうに船から降りた。余もせうこと無しに其等のあとについて尻をからげて這入つた。其の無精らしいのがをかしいと言つて妻もお京も笑つた。もう斯うなると平壤策どころで無くどうでもして此船をして此瀬一

つを越えしめぬばならぬ、其が唯一の大問題であつた。我等と船頭とは力を合せて押した。水が激して膝小僧の上に這ひ上り、時には裾をも濡らした。小男の沼田氏は下帯迄を濡らした。

「洋服のものだけは御免を蒙らうぢやありませんか。」と言つて税關長は洪さんを顧みて落着き拂つてゐた。

だん／＼日が傾いて來て水の上が暗くなつて來た。

「三日月様が。」と妻が言つた。見ると透き通るやうな大空に美しくしい三日月がかかつてゐた。水の流れが急な爲めに船は非常な勢で動きつゝあるやうに見えるけれども、其實同じ所に止まつてゐた。

「駄目だ。」と余は手をゆるめた。

「駄目では無い、もう少しです。」と小男の沼田氏は余を激勵する

やうに言つた。三人の船頭はわめくやうな聲を出して踏ん張つた。余は其等に力を得て又押した。

やつと、其瀬を押し抜る迄には卅分以上もかゝつた。いつの間にか三日月が光りを増て岸の立木も薄く黒ずんでゐた。瀬を越すと水は深くなつて又櫓が漕げるやうになつた。皆へと／＼に草臥れて濡れ足の儘で船に飛び上つた。

料理番は提灯に火を入れて日蔽ひの周圍にぶら下げた。願つて見ると妓生船の方は船が小さい爲めに我等の船から綱を渡して引張るのと一人の船頭が水に這入つて押すのとて存外容易く其瀬を越すことが出來た。さうして其船にも同じやうに提灯がぶら下げられた。

寒さがひし／＼と肌にしみて來た。我等のインパネスは皆女

等が羽織つて我等は又苦い酒を飲んだ。幾ら飲んでも酔はぬ許りか深川の時も同じやうに胃は其を推し戻さうとして唯苦しい許りであつた。どうして此寒さを凌ぎ空腹を忘れ船が歸り着く迄の退屈を紛らさうか。一同の問題であつた。お京と税關長との間には拳が始まつた。客の座布団をいつの間にか一つ占領して上には府尹のインパネスを羽織つてゐる無精さうな藝者は又たチャラン／＼と三味線を鳴し始めた。余は船底に寝轉んで此の不思議な光景を見てゐた。

男も女も皆たゞ騒いでゐた。殆ど絶望の極の躁狂ともいふべきやうに騒いでゐた。今日の船遊びは誰も豫期してゐた程は面白く無かつたに違ひ無い。殊に歸路に着いてからの空腹寒氣などいふ事は堪へ難い苦痛であつた。けれども不思議に落合つた

是等の人々の明日はもう東西に分れ去る紀念の會合としては相當に振つた會合であつた。殊にむづかしい瀬を船を降りて押しただのなども求めては出来ぬ紀念の種であつた。……さう考へて一座の顔を見渡すと一々の顔に一種の深い印象を見出すことが出来た。つゞけて拳に負けたお筆のくやしさうな顔にも、素淡と手を取つて男舞の眞似をしてゐる剛三の顔にも提灯の赤みを帯びた光りの下に此夜で無ければ見ることの出来ぬ淋しい情味を味ひ得るのであつた。

船は税關官舎の横迄歸ることかと思つたに、平壤のつゝさの女郎屋町の裏につけた。其處は本當の船つきでは無く、女郎屋の人々が水でも酌みに降りる路らしかつたが、其處に船板を渡して

其から上ることになつた。

「此處から税關横迄はさうたいした時間もかゝるまいがもう一刻でも早く船から上り度い。」と支局長は言つた。三味線も鼓も糞の中にしまはれたが我等が其三味線をまたげたと言つて色の黒い藝者はぶり／＼と怒つてゐた。けれども皆笑つてゐる許りで相手にしなかつた。

船に釣り下げられてゐた澤山の提灯を三人に一人宛位が手に提げて危ない道を照らした。妓生船だけは今少し上流迄漕ぎ上せるとの事で彼等は皆一様に聲を上げて、

「さよなら。」と言つた。我等の方も皆聲を揃へて、

「さよなら。」と言つた。岸に上つてから見下ろすと我等の船の方には唯一つ提灯が残つてゐる許りて殆ど水上の闇の中に包ま

れてゐたが妓生船の方は澤山の提灯の光に妓生等の顔の色の白いの迄がよく見えた。

其處を上ると妓樓町になつて娼妓とも藝者とも判らぬやうなもの、上方風の赤い提灯の連らなつてゐる妓樓の二階から見下ろしてゐた。色の黒い藝者は其中の二人と馴れ／＼しく言葉を交はしてこの色町の空氣の中に蘇つたかのやうに元氣であつた。

「車が生憎揃はんので困つた。」と支局長は其邊を奔走してゐたが漸く四五臺だけ見つかつたので女連衆だけを其に載せて返すことになつた。

「私はいゝのよ。少し歩かんと何だか氣持ちが悪いから。」とあ筆は獨り乗ることを肯じ無かつた。

「だつて貴女が歸らなけりや困るわ。」とお京は車の上から振り返つた。

「少し歩いてから、すぐ歸るから先に行つて、頂戴よ。」とお筆はすねたやうに言つた。

「さうぢやあさうしませう。」とお京は逆らはずに素淡と車を並べて、妻お久さん、お牧等のあとについて走らせた。

「お先へ。」

「御免下さい。」といふやうな聲の消え去つたあとに男連衆とお筆と藝者とお酌とはとぼくと往來を歩いた。此藝者は岩吉と同じく九曜館の抱へだとかで、頻りに九曜館に立寄つて飯を食つて行けと勧めた。

「ねえ貴方、さうなさいよ。」と彼はなれなれしく剛三の傍にすり

寄るやうにして言つた。

「これから飯なんか焚いてゐては大變だ。宿に歸つた方が安全だ。」と剛三は笑つた。藝者は又余の傍に寄つて來て同じやうなことを言つた。

又車が五六臺見つかつたので剛三、府尹税關長沼田氏、松田慶之助などは皆其々其車に乗つて歸るとになつた。

「ねえ貴方寄つてゐらつしやいよ。」と藝者は又あとに残つた余に勧めるやうに言つた。余は判然した答をせず、支局長に附いて眞直ぐに行くと、藝者とお酌とはとある角に立止つて又呼んだ。

「ねえ寄つてゐらつしやいよ。」

「失敬。」とあとを振り返つて支局長は手を舉げた。二女は其角から右に曲つて九曜館に歸るのであるらしく暫く淋しさうに我

等を見送つてゐた。

藝者等と分れてからは支局長と余とお筆とを餘すのみとなつて三人は餘り人家の無い新開町を星明りの下にとぼくと歩いた。

又一つの車宿を見出したので支局長は我等にも乗ることを勧めた。けれどもお筆は承知しなかつた。

「兄さん、貴方もお歩きなさいよ。一人て淋しいわ。」

「其ならお前も乗らうぢやないか。」

「私いやなの。歩き度いの。」

支局長を載せた車は四五間先に突立つて暫く我等を持受けてゐたが遂に待兼ねたやうに先に駆け出してしまつた。

「到頭二人さりになつたのね。」とお筆は言つた。明日は愈々お別れね。」

「さうだねえ。」

「私お願ひがあるの。」

「.....」

「此處から花屋迄歸るのに何分かゝるでせう。」

「あの灯のともつてゐる通りに出れば直ぐだから二三十分のものだらう。」

「私ねえ、兄さん、此處から花屋の門の處に歸りつく迄貴方の奥さんの積りてゐ度いの。其もねえ私一人てさう思つてゐてもつまらないから兄さんにも其積りてゐて貰ひたいの。ねえ貴方。唯さう思つてさへ下さればいゝのよ。お互にさう思つて本當の御

夫婦の積りて歸らうぢやありませんか。」

「は、は、は、又始まつたね。」と余は笑つた。けれどもどういふわけだか此お筆の言葉は此場合人の心を支配する強い力を持つてゐて無暗に笑つてしまふことが出来無かつた。何故そんな事がして見度いの。」

お筆は余の言葉には答へずに心ゆくやうな大きな呼吸をして、私貴方の奥様ねえ嬉しいわ。たつた二三分間の御夫婦だけけれども其でも本當の御夫婦だもの。ねえ成るべくそろそろ歩きませうよ。……」

「は、は、は」と余は覺えず泣くやうな聲をして笑つた。

「厭よそんな笑ひやうをしては。氣味が悪いわ。」

「……」

「貴方御夫婦になるのが怖い。卑怯な人。」と下げずむやうに言つてたつた二十分間、貴方は旦那様で私が女房といふやうな心持でゐるといふ事に貴方は趣味は無いの。」

「さうすると、羽左衛門と梅幸とて花道を出て來るやうな心持ね。」

「さうね。其とは少し違ふわ。」

「さうだねえ、役者の方は見物人に夢を見さすのだし、お前の方は自分で夢を見やうといふのだから同じとも言へ無いだらう。けれどもそんな事を考へるだけなら僕には少しも珍らしく無いね。」

「さう、貴方はもう度々なすつたことがあつて?。誰と?」

「別に誰と、いふ事は無いけれど文學者などいふものはいつも實際にない事を頭の中で空想して見るのだよ。さうだねえ、お前のは頭で考へる許りで無くて相手を拵へて夢を實現して見や

うといふのだから矢張り僕等のとも違ふかな。

「夢よりもつと情があつてさうして自由では無くつて。」

「さうかねえ。ぢやあ宜しい。お前のいふ通り花屋の門迄夫婦の積りになつて見やう。けれどもさきからもう半分足らずも来たやうだからあと十分餘りの御夫婦ね。」

「でも嬉しいわ。」

二人は黙つて暫く歩いた。兎に角十分間でもこの女が自分の妻かと思ふとをかしいやうなつかしいやうな變な心持がせぬでも無かつた。深川以來持て餘してゐる不思議な女といふ事は忘れて此の奇怪な二人の假想的の關係を興味を以て考へるのであつた。

「ねえ貴方。」とお筆は呼びかけた。

「何？」と余は答へた。

「貴方浮氣をしてはいやよ。」とお筆は言つた。

「するかも知れんよ。」

「厭ですよそんな事を言つては。たとひ十分間でも妻になつてゐる私に厭な思ひをさすことは止して頂戴。浮氣はしないと云つて頂戴。」

「よろしい。ぢやあ浮氣は致しません。」

「さつとですよ。」

「よろしい。」

「其て安心したわ。貴方と私二人切りね。」

「さうだとも。」

余は斯く答へ乍らもふと妻のことを思ひ出した。何だか斯んな事を口から出任せに言つてゐることは妻に濟まぬやうな心持がした。けれども夢だ芝居だと気がつくと思ひ直して眞面目にそんな事を考へるさへ思かな事のやうにも考へられた。

「斯んな仕合せな夫婦が外にあるてせうか。」

「あるまいね。」

「久しい間の戀中でしたものね。」

「さうとも。」

「見棄てちやいやよ。」

「見棄てるものか。」

星明りに話してゐる二人は互に臆氣な顔を見る許りて例の沼のやうな眼が今どんな光を放ちつゝあるか其は判らなかつたが

彼女の聲は一語より一語と熱を加へ來るやうに見えた。

余の足音と筆の小刻みな足音とは人通りの少ない寂しい町に際立つて響いてゐたが、一臺の車の音と横町を通る日本流の按摩の笛との外に其を掻き亂す別の響きも無かつた。

「ねえ貴方。」と筆は又呼び掛けた。

「愈々明日はお別れね。」

「さうだねえ。」

「何故夫婦でゐて別れ無ければならないんでせう。」

「さうさなあ。」

「あの兒の事は忘れては厭ですよ。」

「え？」

「福岡の雑餉隈に里子に遣つてあるあの兒ですよ。」
余は一寸何と答ふべきかに迷ふたが、相變らずいゝ加減に答へ
るより外致方が無かつた。

「忘れるものか。」

「嬉しいわ。」とお筆は堅く余の手を握りしめた。いつの間にか
もう灯火のところどころに點つてゐる新開町らしい小店の點在
してゐる通りに出て、二人は花屋の門前に立つてゐるのであつた。

「もう御夫婦はおしまひね。」と余は笑つた。

「本當だわ。夢は覺めたのね。」とお筆も笑つた。

「あゝ福岡の雑餉隈に遣つてある里子といふのは。」

「貴方と私との中に出來た子ぢやありませんか。」とお筆は又笑
つて、夢は覺めた筈でしたのねえ。もうそんな事聞くのもあやし

なさい。……又明日逢ふわ。ぢやあ、お別れにしませう。」と彼女
は軽く頭を下げた。花屋の暗い軒ランプは淋しい影を二つに分
つた。

四十九

松屋に歸つて見るとお久さんと妻とは飯の用意をして余を待
兼ねてゐた。空腹を充たし乍ら余はお筆の事を二人に話した。

「まあ厭だよ。」と妻はさげすむやうに眉間に皺をよせたが、彼も
お筆の事にはもう馴れてゐるので餘り氣にとめるやうにも見え
なかつた。唯最後の里子の事が暫くの間話題になつた。

「其里子の事が何だか氣がゝりね。」

「實際そんな里子があるのてせうか。」

「僕との間に出来た子がかい。」

「えい。」と妻は笑つて、兎に角お筆さんに子供があるんでせうか。」

「それはどうとも判らぬね。」

「若しあるんなら其子が貰つて育て、見度いわ。」

「ハ、ハ、貰つたらいいだらう。」

其翌日は草臥れ切つた體を思ふ存分朝寝をした。床の中で、

「お久さん今日牡丹臺へ行らつしやるなら御案内します。」と余は聞いて見たが、

「私もう澤山。」とお久さんは思ひもよらぬことのやうに言つたので、其儘に又二度寝をした。

今日は愈々剛三、お筆慶之助、お久さん等の出發を停車場に見送ることゝなつた。お久さんは荷物は大方向直送してあるので、身輕い體を車に托して三人で停車場に行つた時にはもう昨日同遊した人々の顔がぼつくと見えてゐた。支局長は今日は體が痛むと言つて和服の體を乙構さうにしてゐた。其處へ何臺かの車が連なつて驅けつけたのは剛三、お筆慶之助、お京素淡、洪さん等の一行であつた。

「おやお筆さんが……」と妻は驚いたやうに言つた。見ると一見十七八の女學生かと思はるゝやうに仰山に廂の出たロリーマに結つて襟元に派手なりポンを結んでゐたのが此方を振り向きつゝ、ポタリと落ちた揉み上げの後れ毛を無造作に指にて搔き上げ乍ら、

「まあ、奥様も疲れて入らつしやいませう。」と満身に満ち充ちた勇氣を抑へ切れ無いやうに活潑に取り倣して妻の方に近づいて来た。

「貴女は尙ほお疲れていたらう。」と妻は昨日のお筆の活動を思ひ出しつゝ言つた。

「え、随分草臥れましたよ。でも男の方よりは元氣ですわ。石橋の兄さんなんか今朝體がいたいつて大騒ぎなんですもの。」

「宅もさうなんですすよ。」と妻は言つた。其は別に考へがあつて言つたのでは無かつたらうが此宅といふ言葉が昨夜の十分間の妻の耳には定めて際立つて響いたらうと余はお筆の顔を見た。けれども、

「おや兄さんも。」と彼女は何事をも忘れてしまつたやうな顔を

して唯罪も無く笑ふのであつた。

やがて這込つて来た府尹松田税關長なども此お筆の變装に聊か度膽を抜かれたやうであつたが其ても會話は自ら彼女を中心にして待合室は賑はつてゐた。余は慶之助に耳打ちをした。

「いつか君のくれた番附に女賊此海のお龍とかいふのがあつたね。今日のお筆はどうしても『女學生お筆』といふ形だね。」

慶之助も私に恐れ入つたやうな表情をして見せて賛同の意を表した。

「私も何だか一緒に行き度いわ。」とお京は染々と別れとも無ささうに言つた。

「ぢやあ行くさ。」と剛三は投げ出すやうに言つた。

「お筆さんは憎らしい程平氣ねえ。貴女別に悲しくは無いの。」

とお京はお筆をたしなめるやうに言った。

「ちつとも。もう昨日散々別れを惜んだんだもの。」とお筆は人
に悟られぬやうに余に目くばせして微笑した。

「其はまあさうねえ。」とお京は其を昨日の船遊びの事と解釋し
たらしく、「私等を態々京城から呼寄せたりなんかして考へて見る
と贅澤なお別れね。」

斯んな話をしてゐる所へ沼田氏とお牧とは前後して駆けつけ
た。お牧は昨日と同じ服装をして稍々上氣したと思はるゝ顔に
汗さへ流れてゐて黄色い埃のあとの見えるのがお筆の態々野暮
らしく厚化粧をしたのと打映えていつもの通りいゝ對照を爲し
てゐた。

汽車に乗込まうとする間際にお筆は斯んな事を言つた。

「兄さん私満洲へ行つてから小説を書いて送つてよ。いゝこと。」

其少し首をかしげて媚を作つた容子からがどうしても二十歳
以下の女學生としか見えなかつた。彼女が京城以來余に對して
爲したやうな遊戯？は迎ても石橋では埒が開くまいし慶之助で
は物足らぬかも知れぬ。小説を書いて送るといふのは必ずしも
口から出任せといふわけでも無く多少其邊の心持を余に傳へる
ものかとも考へられた。

其うち發車が迫て一同は乗込んだ。ふと見ると妻は今窓越に
お久さんと改めて別離を叙した序にお筆とも何かを話し合つて
二人は笑つた。汽車が動き出した時お筆の大きな眼は見送りの
人を一人も見落すまいとするやうに敏捷に働いて最後に余の眼
と合つた時微笑を湛へてハンケチを動かした。見送りのものは

其動くハンケチを見て帽を振り手を上げた。例の殖民地的の粗大な汽車は大きな呼吸を吐いて北へと向つた。

余はがつかりしたやうに覺えて暫く其あとを見送つた。傍に洪さん素淡お京等を見ることが一層其淋しさを増した。京城に彼等を見棄て、自分等の此方に來る時には少しも感じ無かつた寂寞の感が全身を襲ふのを覺えた。これは今迄如何なる場合にもお筆に對して起した覺えの無い感じであつた。

「私等も明日歸る積りです。洪さんがお歸りになるさうですか。御一緒に伴つてつて戴かうと思ます。」とお京は言つた。「さうすると今度は愈々僕等夫婦だけが平壤に取り残されるのだな。」と余はガランとした停車場に立どまつて訴へるやうにお京等を見た。洪さんと素淡とは朝鮮語で親しげに何事をか話し

合つてゐた。

府尹等は皆別々に歸り去つた。

余は強ひて被等三人を自分の宿に連れて戻つた。さうして其日は染々とした話をした。其は自らお筆に就ての噂が多かつた。翌日三人の立つのを見送る時も府尹以下の人顔が揃つた。お京も洪さんも素淡も口を揃へて今一度歸りに京城に立よれと勧めた。

我等夫婦は尙四五日平壤に逗留した。さうして牡丹臺をも又一度訪ね府尹松田税關長支局長等とも一二度づゝ往來した。其は落附いた淋しい四五日であつた。

今新義州の宿に居ります。淋くつて寒さが張うございます。慶之助さんはお星様の光が違つてゐると申します。私には判りません。今夜安東縣迄行くと石橋の兄さんは申しましたけれど厭だと駄々をこねて遣りましたの。

私は手紙を書くのは面倒で厭なんですけれども今夜は何だか淋しいから此手紙を書きます。出鱈目ですよ。

今日汽車の中で一人の人と石橋の兄さんとのお話を聞いてゐました。其中には斯んなお話がありました。

天草や島原の女が一番えらいんですつてね。豆満江を扱手を切つて泳ぐんですつてね。そんな真似は私には出来無いわ。何でも島原天草五島邊の女が第一軍で長崎福岡山口大分愛媛廣島

あたりが第二軍ですつて。私何軍になるんでせう。

兄さんにお目にかゝつたのは全く御縁ね。

兄さんはひどい人ね。奥さんにお打明けになつてね。御夫婦

の仲つてそんなもの？ 汽車の出る間際になつて雑餉隈の里子

が見度いなんて奥様が。

雑餉隈に行つて御覧なさい。さうして何處かの子守の背に、其らしい子供が居たら知らせて下さい。

汽車の中の話をもつとしませう。

安奉線の出来る時分の事ですつて。お金は皆指輪や腕輪にして肌につけ金目なものは風呂敷に包んで自分の背中に背負ひ、大きなものは苦力に背負はして五六人位宛が一組になつて其安奉線のレール傳ひを北へくと歩いて行くんですつて。其がをか

しいのよ。皆裾をからげて赤い湯もじを出して大きな尻を動かして北へくと歩いて行くんですつて。其が私には旨く書けないけれど其人のお話は其は面白いのよ。目に見るやうに話すんですもの。

四五五

其が皆第一軍ですつて。豆満江を抜手を切つて泳ぐ手合ですつて。

私何だか其女は今でもレール傳ひに北へくと歩いて行つてゐるやうな氣持ちがするの。

旅順にお銀さん奉天にお島さんといふえらい女が居るんですつてね。

お京さん達はもう歸りましたか。

お牧さんによろしく。

私も満洲の山中で茶店でも出さうかしら。

小説はきつと書いてよ。

忘れてゐました。お久様は停車場にお迎への方が見えてゐたのですぐ馬車で舊義州の方へお出でになりました。少しもお疲れのやうに見えませぬ。

もう厭になつたからよします。

新義州にて

筆

今夜は安東縣にゐます。

明日はもう奉天に直行するんですつて。全體何處に行くんでせう。

此處の宿屋の主人も鬚の生えた人よ。お牧さんの旦那様によ

五五五

く似た人。

なんてチャンコロが多いんでせう。車屋も風呂番もチャンコロよ。其筈ね。

愈々もう外國ね。

面白いのよ。宿の主人は私を石橋の兄さんのお妻さんの積りてゐるのよ。其で私も今日は丸鬚に結つて兄さんを旦那さん旦那さんと呼んであげるの。慶之助さんはまあ書生さんつてところね。

宿の主人が久しぶりだから旦那さんと遊び度いでせう。其で私に氣兼ねをするをかしさ。最初は是非一緒に行かうつていふの。「私いやですわそんなお伴は。」つていふと斯んな田舎の藝者も一度は見て置いてもいいんでせう。」

「お二人で行つてらつしやい。私おとなしくお留守もりをするから。」斯う言つてつんとして見せたの。實はねえ兄さん私三嘴さんの世話になつてゐた時も嫉妬なんてももの焼いた覺は一度も無いのよ。どうしてせう。情が無いのね。けれども二人を玄關迄送つて出て板の間に手を突いて行つてらつしやい。」と笑ひ乍ら言つた時は我ながら情を含んでゐて上出来よ。

慶之助さんはお友達がある芝居とかに行つて留守。私にも行かぬかと言つたが兄さんに思ひのたけを書いておくのだと言つて止め。

女中が来て、本當にいやな旦那様ですわね。」と私が素直に出して遣つたのを意氣地無しをやうにいふのよ。「お前さんはお國は何處。」と聞くと長崎との答。第二軍ね。

「どうして此處にゐるのです。」と聞くと何でも人に騙されて奉天に連れて行かれて停車場を降りると目かくしをさゝれて車に載せられて其邊をさりと引き廻されて何だか判らなくなつたところをガラス屋とかに奉公さゝれたのですつて。随分のろ間な面白い女中よ。

私昨日汽車の中で聞いたあの話が面白くつて。まだ赤い湯もじを出して大きなお尻を振つてレール傳ひを北へくへ行つてゐるやうに思はれるの。もう長春ハルピンはとづくに過ぎてしまつたでせうね。

兄さんと奥様は毎日何をしてお暮し遊ばす。多分此方へはいらつしやらず、お國へお歸りの事とお推もじ。浮氣な旦那を出して遣つたあとの物思ひよ。

「人と契るならうすく契りて末をば遂げよ、紅葉を見ようすいがちるか濃いがまづちるものと知れ、さうぢやわいな。」こんなのはいや。

「君と寝やうか、五千石とるか」もいや。

「露は尾花と寝たといふ、尾花は露と寝ぬといふ。あれ寝たといふ寝ぬといふ。尾花が穂に出てあらはれた。馬鹿な尾花ね。」

明日は奉天に行きます。もう暫くは手紙も差上げません。御無事に。

あの雑餉隈の里子の事。

安東縣にて

筆

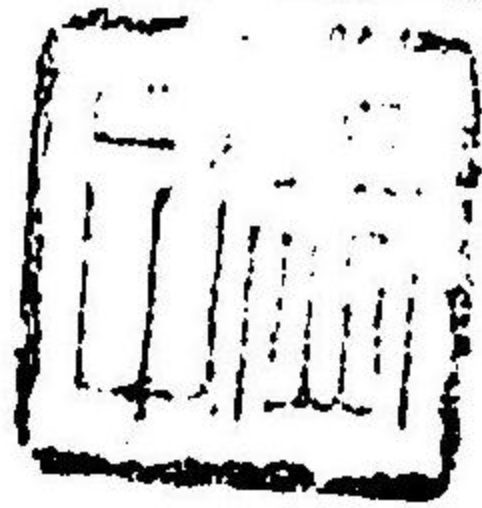
朝鮮終

明治四十五年二月一日印刷
 明治四十五年二月一日發行

朝鮮

不許複製

定價壹圓



著作者

高濱清

發行者

增田義一

印刷者

佐久間衡治

東京市京橋區南紺屋町十二番地
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

發行所

東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社

電話八七四、八七五、八七六
郵便振替貯金口座三二六六

印刷所 鐵秀英舍

讀賣新聞記者 松川次郎君著
●南米と南洋 美中 本版 正價五拾六錢

桑谷克堂君著
●成功富豪の面影 美全 一册 正價五拾六錢

實業之日本社編纂
●富豪の家風 美全 一册 正價五拾六錢

京都大學圖書部員 佐竹義繼君編
●勤王烈士手翰抄 上製金 文字入 正價四拾貳錢

前カラテン女學堂教頭 一宮操子女士著
●蒙古土産 大版上製 金文字入 正價八拾錢

●經濟產業書類

專修學校法政大學教員法學士 工藤重義君著
●經濟財政要義 大版上製 金文字入 正價四拾貳錢

米國エグレストン氏著 藤川忠雄君譯
●處世經濟法 全中 一册 正價四拾錢

米國イリ博士 クキツク博士共著
●經濟學提要 大版上製 金文字入 正價八拾錢

米國ゼンクス博士原著 別府五太郎君譯述
●產業合同論 大版上製 金文字入 正價八拾錢

商業學士小林行昌君 土屋長吉君共著
●中等經濟學 全大 一册 正價四拾六錢

土屋長吉君著
●應用經濟學 全大 一册 正價四拾六錢

淺井藤佩君著
●最新農業經營 全大 一册 正價四拾五錢

宮入良右衛門君著
●經濟的育蠶法 全大 一册 正價四拾五錢

カークギ一翁著 伊藤重次郎君譯
●富の福音 全上 一册 正價四拾六錢

川上善兵衛君著
●葡萄提要 大版上製 金文字入 正價四拾貳錢

法學博士 天野爲之君新著
●經濟策論 菊版上製 金文字入 正價四拾貳錢

伯爵大隈重信君 島田三郎君序 三宅盤君著
●都市の研究 上製 金文字入 正價七拾錢

●衛生書類

醫術武藤喜作君著
●家庭應急手當法 全中 一册 正價四拾錢

報知新聞記者 中村木公君編
●名家長壽實歷談 中 金文字入 正價八拾錢

東京朝日新聞記者 杉村樞君著
●肺病全快談 全中 一册 正價五拾六錢

農學博士 玉利喜造君著
●冷水浴の實驗と學理 全中 一册 正價廿五錢

萬朝報記者 中島氣輝君著

●禁酒禁烟の五年間 全大 一册 正價廿五錢

醫學博士加藤照磨君校閱 西谷龍顯君譯著
●最新育兒法 全大 一册 正價七拾六錢

英國ノールン著 海嶽生譯
●思想健全法 全中 一册 正價四拾錢

藤川忠雄君著
●心機轉換法 全中 一册 正價廿五錢

英國グラウンツキル博士著 海嶽生譯
●簡易安眠法 全中 一册 正價廿五錢

英國グラウンツキル博士著 海嶽生譯
●神經健全法 全中 一册 正價廿五錢

藤川忠雄君著
●頭腦明快法 全中 一册 正價廿五錢

英國グラウンツキル博士著 藤川忠雄君譯
●最新記憶法 全中 一册 正價廿五錢

醫學士 櫻田十次郎君著
●衛生十一ヶ月 全中 一册 正價四拾四錢

●商業實務書類

- 米國ウオルター、デー、ムツァーイ著 堀内新泉君譯 本店新販賣術 全大1冊 正價五拾八錢
- 金澤商業學校長中野觀象君編 島山楓成君書 商業文練習帖 和手本 正價六拾四錢
- 土屋長吉君著 商戰必勝 全中1冊 正價卅五錢
- 土屋長吉君著 商工執務法 全大1冊 正價五拾六錢
- カネギ一翁著 伊藤重次郎君譯 實業の鍵 全大1冊 正價卅五錢
- 前金澤商業學校長 永野耕造君著 商業修身訓 全中3冊 正價四拾五錢
- 中野觀象君著 商業書信文範 全大1冊 正價四拾六錢
- 商業學士 小林行昌君著 英和商用文教科書 全大1冊 正價四拾五錢
- カネギ一翁著 小池靖一君譯述 實業の帝國 附カネギ一翁著 正價卅五錢
- カネギ一翁著 伊藤重次郎君譯 富の福音 全大1冊 正價四拾六錢
- 男爵前島密君序 澤村菊池兩君共著 國民實業指針 全大1冊 正價五拾八錢
- 藤岡秀太郎君著 商品と其荷造法 全大1冊 正價五拾八錢
- 惣崎貞夫君著 生命保險提要 全大1冊 正價五拾六錢
- 市吉徹夫君著 銀行と會社 全中1冊 正價卅五錢
- 土屋長吉君著 商品と商業經營 全中1冊 正價卅五錢
- 土屋長吉君著 最新販賣術 全中1冊 正價五拾六錢
- 土屋長吉君著 商業繁榮策 全中1冊 正價五拾六錢
- 土屋長吉君著 最新商業要綱 全中1冊 正價五拾八錢
- 土屋長吉君著 簡易商業學 上下二冊 正價四拾八錢

- 中野觀象君著 最新外國商業地理 全大1冊 正價五拾五錢
- 宮田千太郎君著 世界商業史綱 全大1冊 正價六拾八錢
- 男爵後藤新平君序 西村正雄君著 最新事務法 全大1冊 正價六拾六錢
- 商業學士 小林行昌君 下平特一君共著 英國商業事務 全大1冊 正價六拾五錢
- 實業之日本記者 都倉義一君著 最新式記帳法 全大1冊 正價七拾八錢
- 中野觀象君著 帳簿式簿記 全大1冊 正價卅五錢
- 千代田生命保險會會計課長 興石丑太郎君著 利廻早見表 全大1冊 正價卅五錢
- 近江屋質店員 奥村喜一郎君著 新實業讀本 和製全1冊 正價卅五錢
- 五十嵐次郎君著 最新商業算術 全中1冊 正價八拾八錢
- 西岡英夫君著 商賈と勘定 全中1冊 正價四拾八錢
- 中野觀象君 高間昭君共著 最新商業書信活法 全大1冊 正價五拾八錢
- 竹内正太郎君著 商業簿記獨習書 全大1冊 正價七拾八錢
- 竹内正太郎君 村塚玄君共著 最新商業簿記 全大1冊 正價六拾六錢
- 市吉徹夫君著 地理と商品 全中1冊 正價卅五錢
- 朝鮮日日新聞社著 百圓の渡韓成功法 全中1冊 正價三十五錢
- 小谷本 桑谷克堂君著 成功富豪の面影 全中1冊 正價五拾六錢
- 藤田鐵造君著 秘訣富豪の面影 全中1冊 正價五拾六錢
- 俗通小僧學問 總振假名 正價四拾四錢
- 四岡英夫君著 立身と繁昌 全中1冊 正價卅五錢
- 在米 柿西藤一郎君著 米國の商店 全中1冊 正價五拾六錢

●修養書類

●品性の勢力 大 版 正價 八 壺 錢
米國前大統領ルーゾヴェルト氏原著 山崎梅處君譯述
●ルーズヴェルト全集 大 版 正價 八 壺 錢
金文字入 郵稅 八 壺 錢
●自助の精神 中 一 版 正價 卅 五 錢
波多野島峰君著 郵稅 卅 四 錢
●新自助論 中 一 版 正價 卅 六 錢
岡三慶君著 郵稅 卅 五 錢
●新武士道實話 上 一 版 正價 八 拾 錢
編多野島峰君著 金文字入 郵稅 八 拾 錢
●健全なる常識 大 版 正價 八 壺 錢
波多野島峰君著 金文字入 郵稅 八 壺 錢
●沈着心修養 中 一 版 正價 卅 五 錢
蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●交際術修養 大 一 版 正價 八 壺 錢
樋口配天君著 郵稅 八 壺 錢
●默想 中 一 版 正價 卅 五 錢
郵稅 卅 四 錢

●日常の言語 中 一 版 正價 卅 五 錢
蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●人格の鍛鍊 中 一 版 正價 卅 五 錢
高須梅溪君著 郵稅 卅 四 錢
●偉人修養の徑路 中 一 版 正價 卅 六 錢
兩宮敬次郎君著 金文字入 郵稅 卅 六 錢
●奮闘吐血錄 中 一 版 正價 卅 八 錢
蘆川忠雄君著 郵稅 卅 七 錢
●意志の鍛鍊 中 一 版 正價 卅 五 錢
蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●讀心術修養 中 一 版 正價 卅 五 錢
蘆川忠雄君著 山崎清風君共著 郵稅 卅 四 錢
●克己心の修養 大 版 正價 八 壺 錢
蘆川忠雄君著 金文字入 郵稅 八 壺 錢
●人格の光輝 大 一 版 正價 卅 八 錢
江口岳東君著 郵稅 卅 七 錢
●樂天の勝利 大 一 版 正價 卅 六 錢
獨逸マイアー氏著 波多野島峰君譯 郵稅 卅 五 錢
●新時代の青年 中 一 版 正價 卅 六 錢
實業之日本記者 岳瀧生著 (公開狀) 郵稅 卅 五 錢

●教育勸語要義 大 版 正價 卅 五 錢
文庫博士井上哲次郎君校閱 植村道次郎君著 郵稅 卅 四 錢
●快活なる精神 中 一 版 正價 卅 四 錢
米國マーデン翁著 波多野島峰君譯述 郵稅 卅 三 錢
●人生の慰安 大 一 版 正價 卅 五 錢
法學博士和田垣謙三君序 蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●常識の修養 大 一 版 正價 卅 五 錢
島田三郎君序 蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●實務才幹訓練 大 一 版 正價 卅 五 錢
男爵瀧澤榮一君序 蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●人生の奮闘 大 一 版 正價 卅 六 錢
男爵前島密君序 蘆川忠雄君著 郵稅 卅 五 錢
●人生の妙味 大 版 正價 卅 八 錢
英國男爵エーウベリ卿 ラポック著 正木照藏君譯 郵稅 卅 七 錢
●樂天の生活 大 一 版 正價 卅 八 錢
伯爵大隈重信君序 蘆川忠雄君著 郵稅 卅 七 錢
●品性の光輝 中 一 版 正價 卅 六 錢
實業之日本記者 岳瀧生著 郵稅 卅 五 錢
●心機轉換法 中 一 版 正價 卅 五 錢
蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢

●不平慰安法 大 一 版 正價 卅 五 錢
米國トマス、ラーチンク氏著 堀内新泉譯述 郵稅 卅 四 錢
●觀察力修養 中 一 版 正價 卅 五 錢
蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●雄健の氣象 中 一 版 正價 卅 四 錢
英國フキリス氏著 蘆川忠雄譯述 郵稅 卅 三 錢
●自彊術 中 一 版 正價 卅 五 錢
堀内新泉君著 郵稅 卅 四 錢
●決斷力修養 中 一 版 正價 卅 五 錢
蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●山崎梅處君譯述 大 版 正價 卅 八 錢
●ルーズヴェルト全集 大 版 正價 卅 八 錢
實業之日本臨時增刊 金文字入 郵稅 卅 八 錢
●人格の修養 大 一 版 正價 卅 五 錢
蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●人格の鍛鍊 中 一 版 正價 卅 五 錢
蘆川忠雄君著 郵稅 卅 四 錢
●商才修養の實驗 中 一 版 正價 卅 六 錢
佛國大問屋主人ビエール著 前川越嶺君譯述 郵稅 卅 五 錢
●成功青年立身訓 中 一 版 正價 卅 四 錢
野田叱咤君著 郵稅 卅 三 錢

●失敗の活用 中一册 正價三拾五錢 郵稅四錢

●高橋勇序 波多野島峯君著 實業青年 自尊の修養 全一册 正價八拾錢 郵稅八錢

●藤原楚水君編 遺訓 座右銘全集 中一册 正價八錢 郵稅八錢

●海老名正君著 新國民の修養 上製 正價八錢 郵稅八錢

●ルースワルト氏著 山崎梅處 松宮春一郎君共譯 奮闘の教訓 全一册 正價四拾二錢 郵稅四錢

●農學博士法學博士新渡戸稻造君著 養 大版上製 正價四拾二錢 郵稅四錢

●慶應義塾々々長鎌田榮吉君著 獨立自尊 大版上製 正價四拾二錢 郵稅四錢

●手紙雜誌主幹 桑田春風君著 男女家庭書翰 中一册 正價七拾六錢 郵稅七錢

●語學數學書類

●高橋五郎君著 英語正確使用法 上製 正價六拾錢 郵稅六錢

●上海同文書院校友谷原孝太郎君著 日清英會話 紙函入 正價八錢 郵稅八錢

●高橋五郎君著 英語熟達法 中一册 正價五拾錢 郵稅五錢

●高橋五郎君著 英語句讀法 中一册 正價六拾錢 郵稅六錢

●米國理學士大木新三君 鈴木精一君共著 現代數難問詳解 上製 正價七拾錢 郵稅七錢

●渡邊德兵衛君 小里運八君共著 實用珠算教科書 全一册 正價五拾錢 郵稅五錢

●高間、上田、中宮三君共著 最新珠算全書 全一册 正價卅五錢 郵稅卅五錢

●五十嵐次郎君著 最新商業算術 上製 正價八拾錢 郵稅八錢

●婦人家庭書類

●京都師範學校教諭 木内菊次郎君著 花むすひ 全一册 正價五拾六錢 郵稅五錢

●梅田嬌葉君著 和洋新案菓子製法 全一册 正價五拾八錢 郵稅五錢

●報知新聞記者 中村木公君編 折衷新案菓子製法 全一册 正價五拾八錢 郵稅五錢

●名流婦人のかかみ 大版上製 正價七拾八錢 郵稅七錢

●醫師 武藤喜作君著 家庭應急手當法 中一册 正價四拾六錢 郵稅四錢

●實踐女學校講師 長谷川岩吉君述 刺繡獨習法 全一册 正價卅五錢 郵稅卅五錢

●京都師範學校教諭 木内菊次郎君著 折紙と圖書 全一册 正價卅五錢 郵稅卅五錢

●山方香峰君著 日常生活衣食住 大版上製 正價卅五錢 郵稅卅五錢

●梅田嬌葉君著 家庭菓子製法 全一册 正價五拾六錢 郵稅五錢

●村井弦齋君著 婦人の日常生活法 特別上製 正價四拾八錢 郵稅四錢

●語學數學書類

●石塚月亭君編 弦齋夫人の料理談 第一編 三册 正價各六拾錢 郵稅八錢

●東京職工學校教諭 本間鶴治君著 俗家庭理科 全一册 正價七拾八錢 郵稅七錢

●西谷龍顯君著 太龍の母の答 中一册 正價四拾四錢 郵稅四錢

●堀内新泉君著 質問に答 中一册 正價四拾四錢 郵稅四錢

●報知新聞記者 天野誠齋君編 家庭日常の實驗 全一册 正價四拾六錢 郵稅四錢

●米國女學記者ヘン氏著 實業之日本社翻譯 女子處世訓 全一册 正價卅五錢 郵稅卅五錢

●赤堀吉松、赤堀崇吉、赤堀菊子三君共著 日本料理法 全一册 正價七拾八錢 郵稅七錢

●鶴岡天淵君著 婦人消息文 全一册 正價八拾錢 郵稅八錢

●西谷龍顯君著 婦人の重寶 全一册 正價五拾六錢 郵稅五錢

●加藤醫學博士校閱 西谷龍顯君譯 最新育兒法 全一册 正價七拾六錢 郵稅七錢

中島文學博士序 長野高等女學校校長波多野市松君著
● 子供の研究 大版上製 正價七拾八錢
 三輪田眞佐子女史序 阿部長咲君著
● 健全なる家庭 全一册 正價廿五錢
 實業之日本社編纂
● 富豪の家風 全一册 正價五拾六錢
 日本石油會社會計課長 竹田常治君著
● 實用家計簿記 全一册 正價四拾六錢
 島田元磨 東草水君合作
● 青い鳥 中版 正價四拾四錢
 少女の女主筆 星野水葉君著
● 新體詩瀆 小版 正價四拾五錢
 婦人世界臨時增刊
● 樂しき婦人 全一册 正價五拾五錢
 木内菊次郎君著
● 紙細工 全一册 正價五拾八錢
 自非悦子女史著
● 家庭衛生料理法 全一册 正價五拾八錢
 松葉靜和女史著
● 造花實習 全一册 正價六拾八錢

下田歌子女史著
● 人常識の養成 全一册 正價四圓半錢
 和石齋文雅著
● 諸流盆石指南 全一册 正價六拾八錢
 讀賣新聞家庭記者 中村秋人君著
● 兒童淚と鞭 全一册 正價參拾五錢
 天野誠齋君著
● 家事實習法 全一册 正價四拾六錢
 米國婦人ウヰルコックス女史原著 三津木春影君譯
● 婦人の新修養 全一册 正價五拾八錢
 村井政齋君著
● 婦人及男子の參考 全一册 正價拾八錢
 木内菊次郎君著
● 最新手工科教授法 全一册 正價廿五錢
 文學士 堀田相爾君著
● 家庭教育の仕方 全一册 正價廿六錢
 女子大學卒業 井上民子女史著
● 大和撫子 全一册 正價四拾五錢
 美譯 村井政齋君著
● 少女讀本 全一册 正價八錢

木村勉君編
● 古挿花の栞 大版 正價四圓五拾錢
 讀賣新聞記者 中村秋人君著
● 幼情と躰 全一册 正價四拾六錢
 保育
 三津木春影君譯
● 皇帝少年旅行 全一册 正價四拾六錢
 謁見
 東草水 川端龍子合作
● 夏やすみ 全一册 正價四拾六錢
 婦女新報主筆 村田天賴君著
● 婦人の心理 全一册 正價六拾八錢
 下田歌子女史著
● 婦人禮法 大版 正價四圓五拾錢
 日本女子商業學校講師 渡邊白水君著
● 少女美談 並上製 正價七十五錢
 郵稅各八錢
 富益 鈴木 田中 三君合著
● 實用園藝全書 箱上製 正價貳拾四錢
 入郵稅十二錢

● 處世書類

前田越嶺君著
● 生存競争法 全一册 正價五拾八錢
 蘆川忠雄君著
● 最良の機會 全一册 正價廿五錢
 園田孝吉君序 波多野烏峯君著
● 紳士と社交 全一册 正價七拾八錢
 ショーンン氏著 山崎梅處君譯述
● 向上的處世法 全一册 正價五拾八錢
 蘆川忠雄君著
● 日常の言語 全一册 正價廿五錢
 ミラー博士著 波多野烏峯君譯述
● 光榮ある生涯 全一册 正價四拾六錢
 マシニース博士著 江口岳東君譯述
● 處世術修養 全一册 正價拾貳錢
 蘆川忠雄君著
● 樂天の生活 全一册 正價五拾八錢
 實業之日本臨時增刊
● 新時代の奮闘 全一册 正價廿二錢

河原智俊君新著 ● 處世經典 袖珍上製 正價三拾六錢 金文字入 郵稅四錢	實業之日本社編纂 ● 成功座右銘 袖珍美本 正價拾六錢 郵稅四錢	男爵辻新次君序 波多野烏峯君著 ● 逆境離脫策 大版上製 正價八錢 金文字入 郵稅四錢	米國エグルストン氏著 蘆川忠雄君譯 ● 處世經濟法 全一册版 正價四拾四錢 郵稅四錢	波多野烏峯君譯著 ● 處世の標準 全一册版 正價卅五錢 郵稅四錢	英國リッチー氏著 山崎梅處君譯 ● 富豪實驗教訓 全一册版 正價六拾八錢 郵稅八錢	實業之日本臨時增刊 ● 同情の勢力 全一册版 正價廿貳錢 郵稅貳錢	波多野烏峯君著 ● 社會側面觀 全一册版 正價七拾八錢 郵稅八錢	實業之日本社編纂 ● 處世座右訓 袖珍美本 正價貳拾錢 郵稅貳錢	實業之日本社編纂 ● 成功錦囊 全一册版 正價六拾錢 郵稅六錢
蘆川忠雄君著 ● 應對談話法 全一册版 正價廿五錢 郵稅四錢	米國ジョン、グラハム君著 ● 英文處世教訓 全一册版 正價卅五錢 郵稅四錢	米國富家グラハム翁書信 ● 成功者處世教訓 全一册版 正價四拾六錢 郵稅六錢	大勳位伊藤公願序 大隈伯自序 江森泰吉君編 ● 大隈伯百話 大版上製 正價貳圓全錢 金文字入 書留小包六錢	米國エール大學教授哲學博士 朝河貫一君著 ● 日本の禍機 全一册版 正價五拾八錢 郵稅八錢	實業之日本記者 橋益生著 ● 獨笑珍話 袖珍美本 正價四拾錢 郵稅六錢				

●**雜書類**

鶴岡天淵君著 ● 書信文大成 全一册版 正價八拾錢 郵稅八錢	鶴岡天淵君著 ● 文章大成 全一册版 正價八拾錢 郵稅八錢	英國リチャードソン氏著 實業之日本社譯述 ● 最新讀書法 全一册版 正價四拾六錢 郵稅六錢	山方香峰君著 ● 讀書便覽 全一册版 正價四拾錢 郵稅四錢	實業之日本社編纂 ● 發奮の動機 全一册版 正價四拾錢 郵稅四錢	實業之日本記者 藤原楚水君著 ● 美辭寶監 全一册版 正價七拾八錢 郵稅八錢	佐藤青吟君著 ● 學生の前途 全一册版 正價卅五錢 郵稅四錢	大隈伯序 永井柳太郎君著 ● 思ひ出の記 全一册版 正價八拾錢 郵稅八錢	文學士 藤田篤君著 ● 實川文字便覽 全一册版 正價五十五錢 郵稅六錢	高須梅溪君著 ● 滑稽趣味の研究 全一册版 正價六拾錢 郵稅六錢
實業之日本社編 ● 優等學生勉強法 全一册版 正價四拾錢 郵稅四錢	加治木常樹君編 ● 西郷南洲書翰集 大版上製 正價九拾錢 寫真入 郵稅八錢	文學士 久保天隨君著 ● 實用作文法 全一册版 正價四十五錢 郵稅六錢	文學士 久保天隨君著 ● 書信文作法 全一册版 正價四十五錢 郵稅六錢	文學士 久保天隨君著 ● 敘事文作法 全一册版 正價四十五錢 郵稅六錢	文學士 久保天隨君著 ● 美文作法 全一册版 正價四十五錢 郵稅六錢	文學士 久保天隨君著 ● 儀式文作法 全一册版 正價四十五錢 郵稅六錢			

實業之日發行 五大大雜誌 !!

▲實業之日本

▲一冊拾壹錢郵稅一錢▲每月二回一日五日發行▲一年分全三圓拾錢

▲婦人世界

▲一冊拾五錢郵稅一錢▲每月一回一日發行▲一年分同二圓五錢

▲日本少年

▲一冊拾錢郵稅一錢▲每月一回一日發行▲一年分同二圓五錢

▲少女の友

▲一冊拾錢郵稅一錢▲每月一回一日發行▲一年分同二圓五錢

▲幼年の友

▲一冊拾錢郵稅五厘▲每月一回一日發行▲一年分同二圓五錢

●最新刊書籍

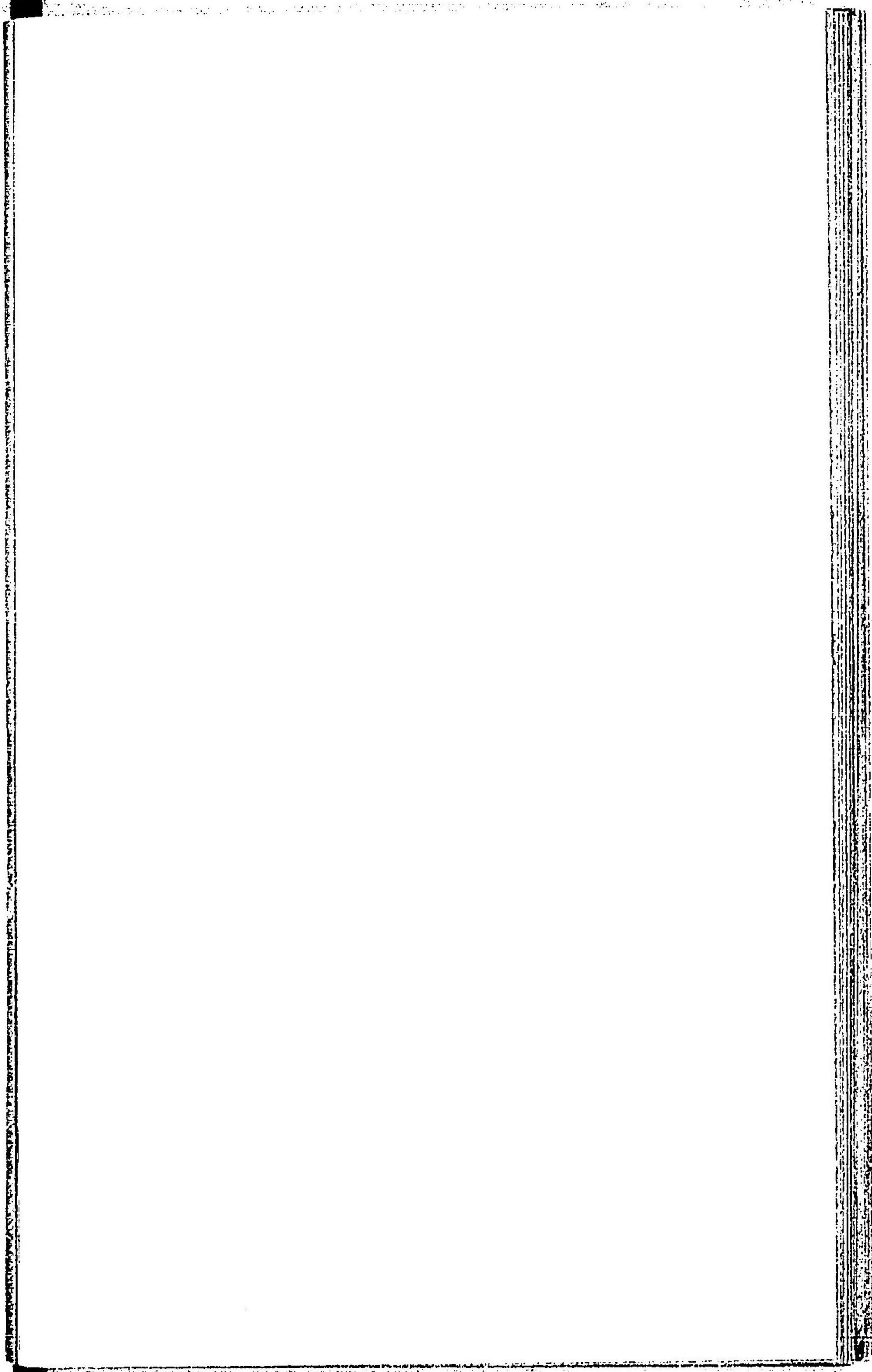
- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------------------------------|--|--|---|--|----------------------------|--|--------------------------------|---|---------------------------------|---|--|--|--------------------------------------|---------------------------------------|--------------------------------------|--|--|---|
| 高須梅溪君著
新時代普通文
全一冊 正價五十錢
郵稅六錢 | 新渡月、坪内、和田三博士監修、實業之日本社編
和俗語熟語故事大辭典
全一冊 正價四十五錢
郵稅四錢 | 報知新聞記者 鹿島櫻卷君著
江藤新平
全一冊 正價四拾錢
郵稅六錢 | 藤原祿次君著
地方青年團體の組織及事業
全一冊 正價五十錢
郵稅六錢 | 上屋長吉君著
實踐會計整理法
全一冊 正價五十錢
郵稅八錢 | 名士奇聞錄
三美本 正價五十錢
郵稅六錢 | 日本女子大學長 成瀬仁藏君著
進步と教育
全一冊 正價七十錢
郵稅十錢 | 農法學博士 新渡月稀造君著
世渡の道
目下印刷中 | 文、博士 谷本富君著
女子教育
全一冊 正價五十錢
郵稅六錢 | 高濱虛子君著
鮮
頗美本 正價八錢
郵稅八錢 | 非上民子女史著
山田琴歌詳解
美大 本 正價七十錢
郵稅八錢 | 藤波芙蓉君著
合せ鏡 (二名化粧法)
頗美本 正價卅五錢
郵稅四錢 | 京都大學助教授 河上肇君著
經濟と人生
上中 製版 正價八錢
郵稅四錢 | 細川風谷君著
家庭新講談
全一冊 正價五十錢
郵稅六錢 | 品川卯一君著
最新賣出し法
全一冊 正價四十錢
郵稅四錢 | 兒玉花外君著
日本男兒
美小 本 正價四十錢
郵稅六錢 | 史詩 瀧澤素水君著
怪洞の奇蹟
美大 本 正價卅五錢
郵稅六錢 | 文學士 津金潤村君著
對歐米近代文豪美文抄
全一冊 正價四十五錢
郵稅六錢 | 實業之日本社編
英語熟達ノート
全一冊 正價五十錢
郵稅六錢 |
|---------------------------------------|--|--|---|--|----------------------------|--|--------------------------------|---|---------------------------------|---|--|--|--------------------------------------|---------------------------------------|--------------------------------------|--|--|---|

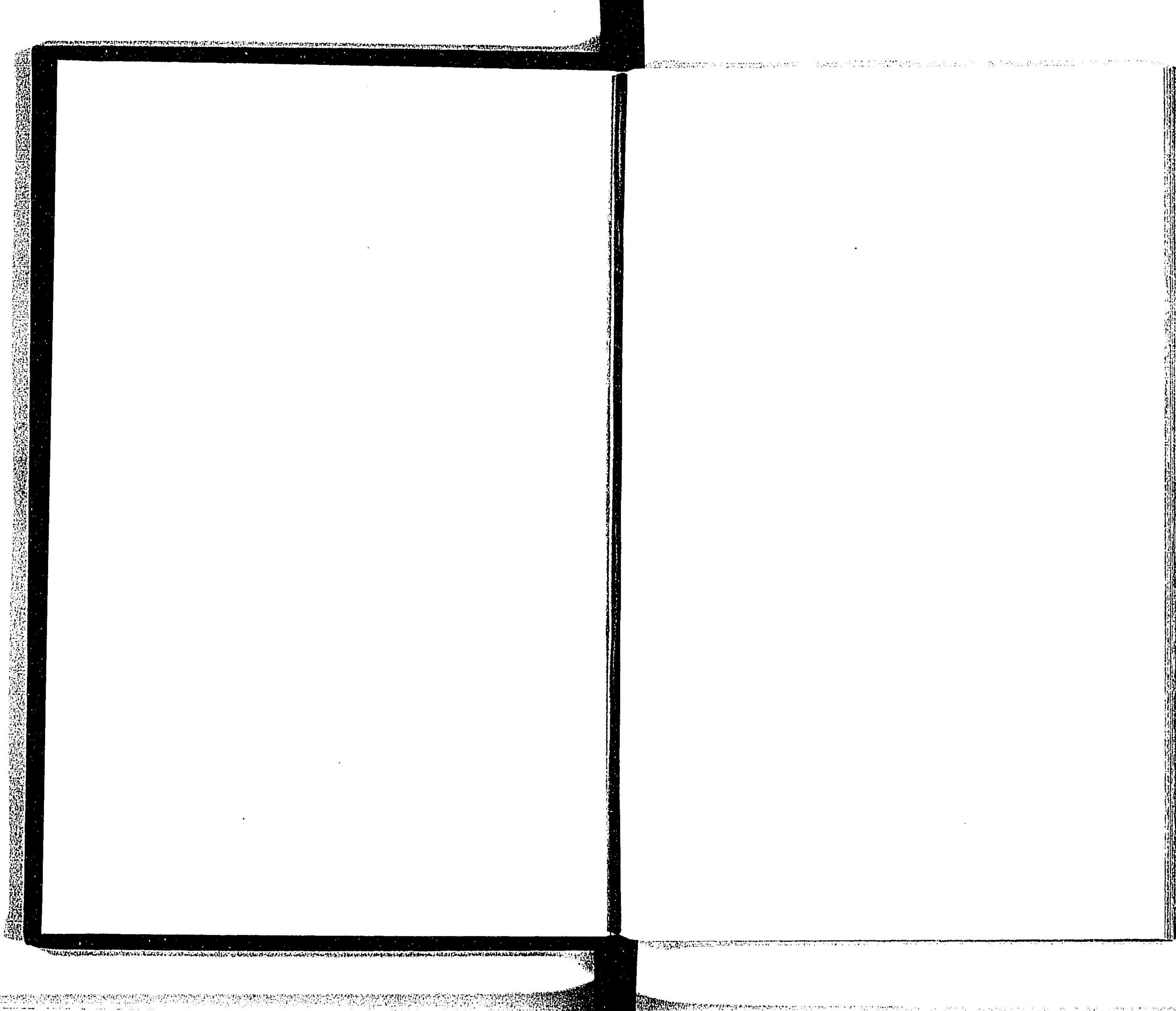
▲我社出版部の活動

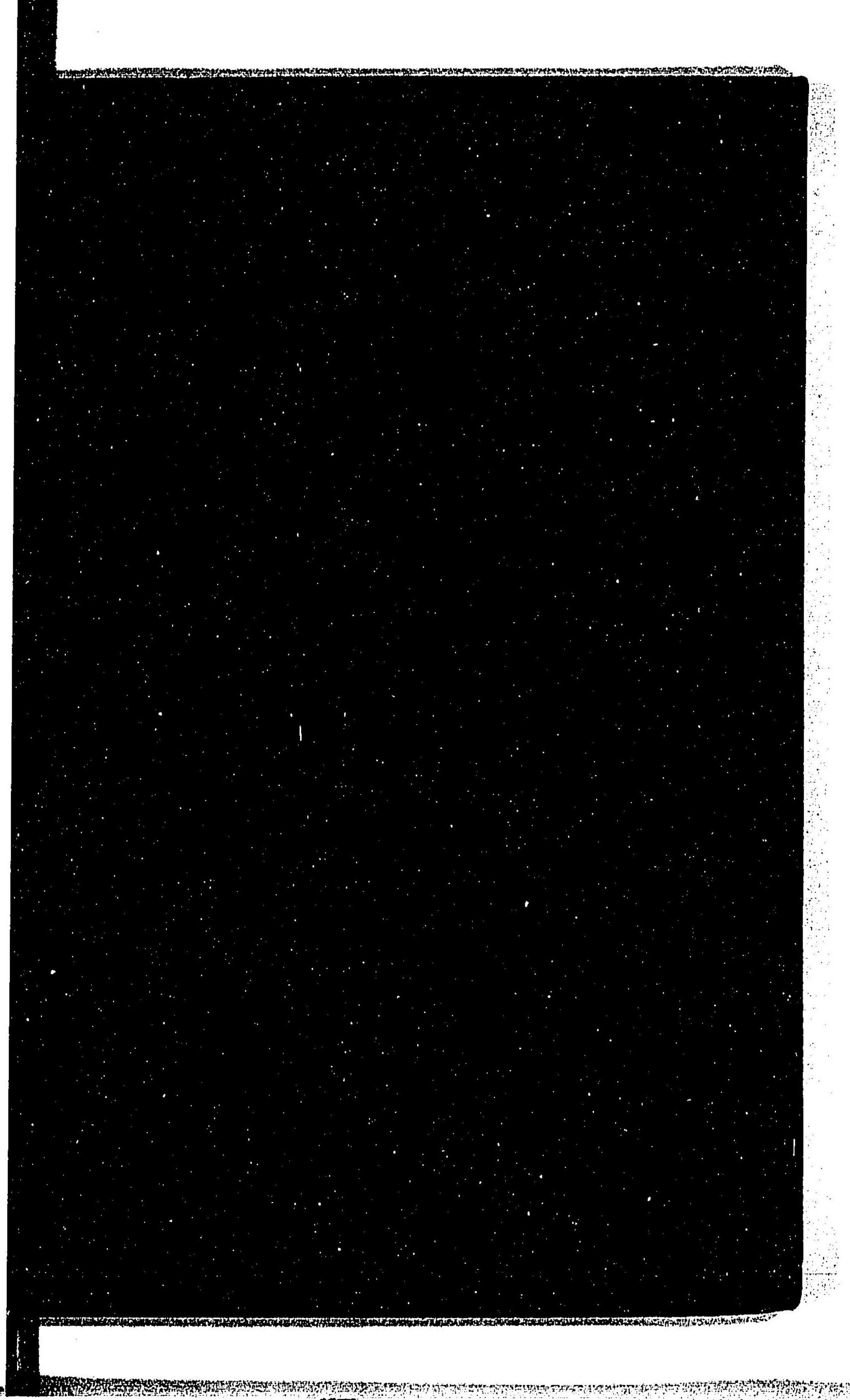
四十四年の新春と共に新らしき活動期に入りし出版部は、四十五年の新天地を
迎ふると共に、更に又新らしき大活動を開始せんとす。

新渡戸博士の『修養』と鎌田先生の『獨立自尊』とは近來の名著として讀書界空前
の大歡迎をうけたりしが、我社は更に、是等の名著に次で、谷本博士の『女子
教育』成瀬仁藏先生の『進歩と教育』新渡戸博士の『世渡りの道』等を刊行して讀
書界の渴望を醫せんとす。而して所謂活動は尙茲に止まらず。不健全なる文藝
の横暴に對して敢て健全清新の趣味を提供せんが爲、文壇の驍將高濱虛子先生
の新作『朝鮮』を上梓せんとす。而して更に婦人家庭の方面に於ける、下田女史
村井弦齋先生の新著を始めとし、經濟實業歴史等の各方面の大家の大著を刊行
するのみならず、特に中學生諸君と少女諸子の爲に、破天荒なる新計畫の
下に大出版をなさんとす。

若し夫れ『英和俗語熟語故事大辭典』を刊行して世を驚かしたる我社は、斯の方
面に於ても大に面目を一新して大活動を始めんとす。乞ふ刮目して待たれよ。







338
68

026419-000-0

338-68

朝鮮

高浜 虚子/著

M45

ADD-0072



